

サキュバスアドベンチャー

「出口」



「明日から冒険者として生きていく」。

その考えが浮かんだ時、しぼんだ青年の心に活力が戻った。





青年が「石運びの人夫」となって半年が経とうとしていた。

石切り場で整えられた石材を麻袋に詰めて運ぶ。本来なら数分とかからない距離が途方もなく感じられる。

袋の持ち手が指へ噛むように食い込む。

朝から晩まで。石材は尽きない。遅れると身が竦むような怒号が飛んでくる。

汗で、川から這い出たばかりのように全身が濡れ尽くす。指が赤熱し、皮がずるむけ、もう何もわからなくなるのと同時に仕事が終わっている。



しかし、田舎から飛び出してきた青年が、何の頼りもなく町で暮らしていくには、この手段しかなかった。

思い出すだけで気が滅入る、故郷の生活。

時代錯誤な老父。口うるさい老母。

同世代の青年たちの輪には入れず、女性からは相手にされない。陰で誰からも馬鹿にされている毎日。

全てを変えたいと思い、ほとんど家出のような形で、町にやってきたのが半年前。

辛い仕事から逃れたい。しかし、故郷にも帰りたくない。

「冒険者」は「ダンジョンで魔物を狩り、見つけた金品で生計を立てる」者を指す。

許可も免許も必要ない。実際に魔物を狩ったり、運よく金目の物を見つかったりして生活が成り立ちさえすれば、それで「冒険者」だ。

時間にも縛られず、一人なら人間関係に悩まされることも無い。

まさに青年にとって理想の仕事と感じられた。



ひと月に一度しかない休みの日がきた。

前日に準備は済ませていた。狭く汚い六人部屋の寝床で、周囲にわからないようこっそりと荷造りをした。

パン。水筒。そして実家を出る時にこっそり持ち出した短刀。年代ものだがずっしりと重い。これが将来の「仕事道具」となるのだ。



青年は町を出た。

いつも休みはぐったりと寝床で体を横たえているが、今日は体に満ちている活力によって、いくら歩いても疲れを感じることはなかった。

今日はあくまで「下見」。どこか手ごろな「ダンジョン」を見つけ、勇者として生きていくことが可能かどうかを確かめるまでのつもりだった。

街道ではなく、人の手がほとんど入っていない自然の領域へ進んでいく。



岩に腰かけて休憩を取る。

空がどこまでも高い。

乾いたパンを千切って、口に放り込み、水で流し込む。  
小麦の香りがする。

鳥の鳴き声が静かに響いている中で、涼しい空気を吸い込んだ。



しばらくして立ち上がり、再び歩き始めた。





昼過ぎごろ、山肌に小さな洞窟の入口が見えた。

小雨でも降っていたら、つつい雨宿りに向かってしまいそう  
だ。

洞窟がダンジョンになり易いというのは、この世界の洞窟だっ  
た。

入り口まで続く道は木が少なく、進みやすい。何の恐れも感じ  
なかった。

まるで穴に吸い込まれるようだった。



中がダンジョンになっているかどうか、確かめようと青年は思った。

入り口を潜る時、青年の脳裏に、昔、どこかで聞いた話が浮かんだ。

「冒険者」として生計を立てる者は皆、このような洞窟の口を、入り口ではなく「出口」と呼ぶ。

臃げだが、確かそうだった内容だった。  
詳しい中身は思い出せない。

入口をくぐる。

中はひんやりとして、湿り気のある空気が満ちていた。

壁面が緑の苔で覆われており、黴や埃に似た臭いがする。



ところどころに光が差ししており、先へ歩いていくことができる。  
足元も平坦だ。

何の気配もしない。果たしてこの先に魔物がいるのだろうか？



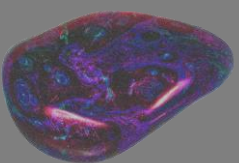
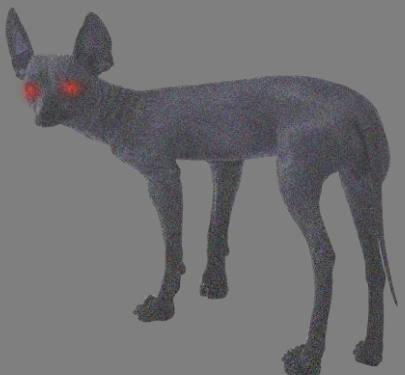


「見かけたら絶対に、何を置いても逃げること」。

何もかも常識離れた存在で、どんなに小さい魔物でも、決して近づいてはならないとされている。

最もおぞましく、最も不可解な特性なのが、「人間を特に選り好んで捕食したり、殺したり、苦しめたりする」こと。

まるでこの世界に生きる人間を罰するために生まれてきたような存在だった。



青年は我に返って足を止めた。

周囲の暗がりの濃さが、ちょうど、不安になり始める分水嶺を  
超え始めたところだった。

繋がっているはずの外の空気をもう感じない。頭からつま先ま  
で「洞窟」に入り込んでいる。

震えが起こるほどの冷氣。しかし、汗がにじみ出てくる。

この洞窟、思っていたより深い。

もし、ここが本当に魔物の巣で、暗闇のどこかに魔物が潜んで  
いたら……

とりあえず、一旦この洞窟は出よう。青年は思った。

まだ数分しか経っていないが、急に光が恋しい。外の空気を吸いたい。何もこんなに急いで魔物を探さなくてもいい。一旦出て落ち着こう。速足で、いや、走って――





「…………っ！」

……び、びっくりした。

驚かそうとしたら、カウンター食らった……耳痛あ……

……こんな感じで、悪いことすると、自分の身に返ってくるから、みんなも気をつけよう！



じゃ、お元気で！」



「……………つて、

帰るか！！！！

誰だよ！ 気になりすぎるだろ！」



「……………」

「……………」



「ひ……。」

……げ、激烈にスベった……。

洞窟暮らしの長い私でも完全にわかるこのとんでもない空気……

トラウマになりそう……第一印象最悪すぎる……



ご、ごめん。

何もかも一旦無かったことにして、最初から自己紹介していい？」

青年はうなづくしかなかった。

「私はこの洞窟に住んでる魔物。

驚かせちゃってごめんね。久しぶりの人間だし、ついちよっかい出し  
たくってさあ〜」



血の気を全く感じない白い肌。

ぴんと横に尖った耳。山羊を思わせる角。

そして、自らのことを「魔物」と言った。

青年は戦慄する。

人間の言葉を喋っている。

それに、この姿。

魔物というのはどれも、グロテスクな、化け物のような見た目をしていると思っていた。



「つていうか、いくら何でも油断しすぎじゃない？」

私が言うのもあれだけど、ここ、魔物の巣だよ？

もう少し奥に行くと、コウモリっぽい、音波を浴びせて動けなくしながら血をチューチュー吸ってくる魔物とか、ネズミっぽい、高速で近づいてきて両脚を骨ごと齧り取ってくる魔物とか、山ほどいるからね？



もしかして、知らずに入ってきた系の人？」

青年はとにかく、「魔物」が会話をしてくるこの現状に、頭が追いつかないでいる。

流暢で、声音も明るい。



「いや、流石に何にも知らなかったわけじゃないよね？ だって腰に刃物持ってるし。」

気になるなあ。

よし。この私に事情話してみ？」



あまりに気さくな、初対面とは思えない態度で話しかけてくる魔物を前に、青年は思わず口を開いてしまう。

「あ、あの……。僕、冒険者になろうとして……。今日はダンジョンを探しに来ただけど……」

つい、自分が他の誰にも秘密にしている目的を言ってしまう。

さらに青年は、言い終わってから気づいた。

相手も「魔物」なのに、一体自分は何を言ってるんだ？

もし「冒険者」という言葉の意味を知っていたら、どうしよう。青年は緊張した。

「ふうくん、そうなんだ。」

冒険者ってあれでしょ？ 危ない魔物退治してお金もらったり、洞窟で宝探しとかする、人間の仕事だよね？

じゃあ、私、手伝ってあげよっか？」



「…？」

「ああ、魔物を退治するほうじゃないよ。

要は『お金』が手に入ればいいんでしょ？

私、この洞窟で一つだけ、『宝箱』がある場所を知ってるの」



「え!？」

「開けたことが無いから中身はわからないけどね。

大きいからいっぱい入ってるかも？ あはは、単純かな？

私に使い道無いから、中身全部持って行っていいよ」

青年は耳を疑い、多分聞き間違いでないとわかると、恐怖や不安とは別の感情で息苦しくなってきた。

魔物の巢には得てして「宝箱」が眠っている。

古代に誰かが隠したのか、それとも魔物側が用意したものなのか、理由はわかっていない。

人生を変えてしまうほどの宝が秘められていることもあり、多くの「冒険者」が危険を冒す原動力となっている。

いくら使っても使いきれないほどの金銀財宝。永遠の若さを授ける霊薬。世界を変える叡智が記されている本。万物を両断できる剣。嘘か誠か、様々な逸話は枚挙に暇がない。



青年の胸には焼きつくような期待が湧き上がってきた。

こんな小さな洞窟に、大財宝が眠っているわけがない。多分がっかりするような中身のはず。もしかしたら空かもしれない。

必死に言い聞かせて自分を留める。





「じゃ、取りに行こっか。  
ここから歩いて十分くらいのところにあるの。  
他の魔物に見つからないように案内してあげる。」

……あ、そうだ。まだ聞いてなかった。ねえ、名前何て言うの?」

「……あ……」

青年は思わず名乗ってしまった。



「ありがとー!! ♡ 宜しく ♪ 『—』 ♡」

「……!!」

一瞬、どきっとしてしまう。相手が魔物であるという意識はもうかなり薄れてしまっている。ひたすら明るく積極的に接してくる魔物に対して、好意のような感情が芽生えていた。



魔物は青年と横並びになり、奥へ向かって歩き始めた。

岩がごつごつと尖っている。

「ここをまつすぐね」

たとえ明かりで照らされていたとしても、躓いてしまいそうな地面だった。踏みしめる位置を凝視して進む。

「……大丈夫？ 寒くない？」

人間って服とか着てないと辛いんだよね？ 私、その感覚よくわか  
かないからなあ。

あ、そこ左ね」

奥へ行くほど空気が冷たくなっている。しかし青年は、状況に混乱して寒いのか熱いのか、感覚がよくわからない。

魔物の指示に従いながら、どんどん奥へと進んでいく。

身を屈まないと通れない道を抜けたり、自分の身長より高い段差を恐る恐る降りたりして進んでいく。

先に言われた通り、一匹も他の魔物に遭わない。

「あ、ストップ。こっちは危ないから、そっちの道を通っていこ」

前がほとんど見えないほどの暗さにも関わらず、自宅の廊下を歩いているようにすすいすすいでいく。これほど頼りになる案内人もいない。

「結構歩いたね。大丈夫？ 疲れてない？ 魔物と人間だと体力に差があるから。宝箱はもうすぐだからね」

魔物がいたわるように語りかけてきた。

我に返って考えると、魔物は「十分かかる」と言っていたが、軽くその倍の時間は歩いたように思える。

闇が冷ややかに立ちこめている。



「……」



「……後出しみたいで申し訳ないんだけど、ひとつだけお願いして、いい？」

「……？」

魔物は上目遣いで、いつのまにか青年の至近距離に寄りそっていた。パーソナルスペースの内側にいるが不快感はない。

むしろ、どきっとしてしまう。

「宝箱をあげるかわりに、私と『友達』になってほしいの。」



私はもう何年もこの洞窟にひとりきり。『会話』ができる相手がないの。人間の文化や生活にも興味があるし、それに何より、あなたがいい人そうだから……」

「!?!」

思わぬ提案に、青年の心へさざ波が立つ。

相手は魔物だ。

危険であることに加えて忌避すべき穢れた存在とされている。目にしただけで災いを呼ぶということも噂されている。

しかし、目の前の「彼女」はどうだろうか。見た目は人外だが目鼻立ちは整っており、親しく会話もできる。

また、人間にない知識も備えており、今後も有用な知識を授けてくれるかもしれない。

青年はそして回顧する。これまでの人生において、誰かから「友達になってほしい」などと言われたことは一度も無かった。

自分が必要とされているという感動はなじみ薄いものであり、青年の心を強く惹きつけた。

青年はうなずいた。この魔物と友達になりたい。

「ほんと？　ありがとう!!」

向けられた方まで心が華やぐような笑顔。

「それならね、友情の記念に、もうひとつお願いしたいことがあるの。次々凶々しく、後出して条件つけちゃって、ごめんねー。で、そのお願いなんだけど……」





「私と、『ハグ』してほしいの♡ 裸になって♡

ただそれだけ。それが最後のお願い」



「.:?.:」

聞き間違いか、人間と魔物とで言葉の意味が違うのかもしれない。  
青年は動揺を表に極力出さないように堪えた。

「ごめんね。人間って、衣服を身に着けないでいたりとか、肌と肌  
を触れ合わせることに抵抗感あるんでしょ？」

でも、意味は想像してる通りだと思うよ。『ハグ』って、体の前  
と前をくっつけ合って、腕をお互い背中に回して、ぎゅっ、って、  
密着させることを言うんでしょ？



突飛なお願いだと思うかもしれないけど、これには一応理由があ  
るの」

「魔物のことを根本から嫌いで、何が何でも殺さないといけないと思っっている人間がいるでしょ？」

もちろん、あなたは違うと思う。何となくだけど、凄くいい人そだって伝わるから。

そういう人は、魔物と肌を合わせることを嫌う。



無防備に『ハグ』できるってことは、魔物に対して憎しみや敵対心を持ってないっていう何よりの証拠なの。

すぐに終わる、魔物と人間の友情のテスト。受けてくれない？  
今、ここで」

青年は逡巡する。

もってもらしい方法だ。魔物に触れたことがあるだけで、呪われたとみなして追放する集落もあるという。

「裸になってハグ」をするという要求。確かにひるんでしまうが、金銭でも物でもなく、たかだか数分で簡単に済ませられる行為だ。どんな宝かはまだわからないが、やって損をするということは無いように思う。



それに、少しだけ心配なこともある。

もしこの要求を断って、魔物がこちらを見限ってしまうことになったら、帰り道はどうなるだろう。

暗い中にいくつも分岐があつて、何も考えずぼんやり導かれていただけなので、迷わず帰れる自信が無い。

もしここに置いていかれて、出られなくなったりしたら……

静かな洞窟に衣すれの音が響く。

青年は最初物陰で脱衣しようと思ったが、目の前の魔物が当たり前のことのように裸体を晒しているのにおかしいと思い直した。羞恥を押し殺しながら目の前で全て地面へ落としていく。上着、靴、腰の短刀――

最終的に性器までも晒し、一切何も身に着けていない状態になった。青年の性器は他人よりも少し小さいので、それを気にしていた青年は少し後悔する。



それも含めて青年の頭は激しく混乱していた。こんな状況、つい一時間前までは毛ほども想像していなかった。

魔物と知り合い、洞窟の中で裸になり、そしてこれから魔物と裸同士で「ハグ」をする。一体自分は何をしているのだろう。

自分の置かれている現実があまりに有り得ず、足が地面から浮いているような、白昼夢を見ている気分になる。

「ありがとー♥ じゃあしよつか、『友情のハグ』♥」

魔物が岩盤の上を歩き、近づいてくる。

魔物の体を凝視する。今からあの体と抱き合う。

白い肌はぎよつとするような違和感を放ちながら、同時に視線が惹きこまれるような魅力も併せ持っている。

うっすら光沢が見えるほど滑らかだ。華奢な体に反して、出会った時からなるべく考えないようにしてきたが、胸も、尻も量感がたっぷりである。



「早くしないと寒いよね？」

しかし青年は、あまりの状況にそんなことは気にならなくなっていた。

「さ 来て♥ 肌と肌で温め合お♥」

魔物が腕を広げた。一人分がすっぽり入る大きさ。

そして体を前に傾け、さらに近づいてくる。

こうなるともう、青年も同じように腕を広げ、「合わさる」格好になるしかない。

最後に、ふわっと、魔物の髪先からえもいわれぬ香りが鼻に漂って来た。異国よりもっともっと遠く、異界にしか存在しない妖しい香料のような。鼻腔がとろける甘い香り。

体が弛緩する。そこへ――



たふん♡ むにゆううつ♡

胸板にスライム状の物体が押しつけられる感触がした。

魔物が青年の背中に腕を回し、みっちり肌と肌を密着させる。胸、腕、肩、腹、太もも、脚。

「あっ！？ あっ！？ はうあああああああ」

~~~~~♡」



青年の大声が洞窟に反響した。

肺内の空気が丸ごと出て行った。

青年は魔物の体に縋りついた。

「あぁっー！っっ♥ あっー！っっ♥ あぁぁっー！っっ♥」



生まれて初めて強い衝撃を受ける赤ん坊のように、あられもない声を上げる。

「……くっっ♥」

魔物の肌は人よりほんの少し冷たかった。

しかし肌触りは瑞々しく、青年の肌にぴったりと吸いついてくる。

青年の声の理由は、その感触の凄まじさだった。

ほんの僅かでも擦れ合うと、摩擦によって脳の表面がぞわぞわと波立つ。



天女の羽衣はその肌触りだけで男を恍惚に浸らせるというが、それが命を持ったものがこの肌だと青年は感じた。

魔物の肌はどんな高級な絹よりも恐ろしくきめ細かい。男の肌の細胞ひとつひとつと噛み合う。しかも、その下の肉は触れたものを漏れなく沈み込ませる弾力をもっている。

まるでトリモチだった。

青年は捕らえられた羽虫のように魔物の体からべったりと離れられない。

そして魔物の豊かな胸だけが、悪戯っぽく反発してくる。

たふんっ ♡ たふんっ ♡

「うあっ ♡ あっ ♡」

凶悪な水毬の中に体ごと埋まってしまった。



「あっ♡……はあっ♡……」

青年はその甘美な感触の全てを、体の前面を使って堪能していた。むしろぶるように。

体表が甘く爛れ、脚の力が入らない。死にかけの蟬が木にしがみつこうように魔物の体へさらに力を移していく。背中に深く腕を回す。

ずっとこの凄い体にしがみついていた。時間の感覚が無くなっていく。



それどころではなかったので青年は気づいていなかったが、青年のペニスは破裂寸前なまでに勃起していた。

魔物は自らの下腹部に押しつけられる感触で、そのことを感じていた。

「クスクス♡」



「ねえ、もう一つだけお願いがあるの」

魔物が顔を青年の肩の上に乗せたまま、囁く。顎の動きを感じる。さっき、「最後のお願い」と言っていたはずなのに。しかし、全ての疑念は、首筋に吹きかけられる暖かい吐息を前にとろけて消えてしまった。



。 「私と『握手』をしてほしいの。友情の印に。ただし、『この状態』のまま  
で。手は塞がってる。だから、別の部位を使って『握手』するの♥」

「それは舌。舌と舌で握手するの♡

口の中でぐちゅぐちゅって絡ませ合って♡

わかりにくい？ じゃあ、人間の言葉で表すとね、『ディープキス』。それと全く同じことをするの。これなら具体的にわかるでしょ？」

「…?…?」



確か『それ』も、物凄く仲がいい相手とだけの行為なんだよね？ じゃあ、この『友情テスト』にうってつけだよな？」

青年は、頭の中の水面に巨石を投げ入れられたようになった。今ハグをしている「彼女」と、何の心構えもしていないのに――

「……クスクス♡」

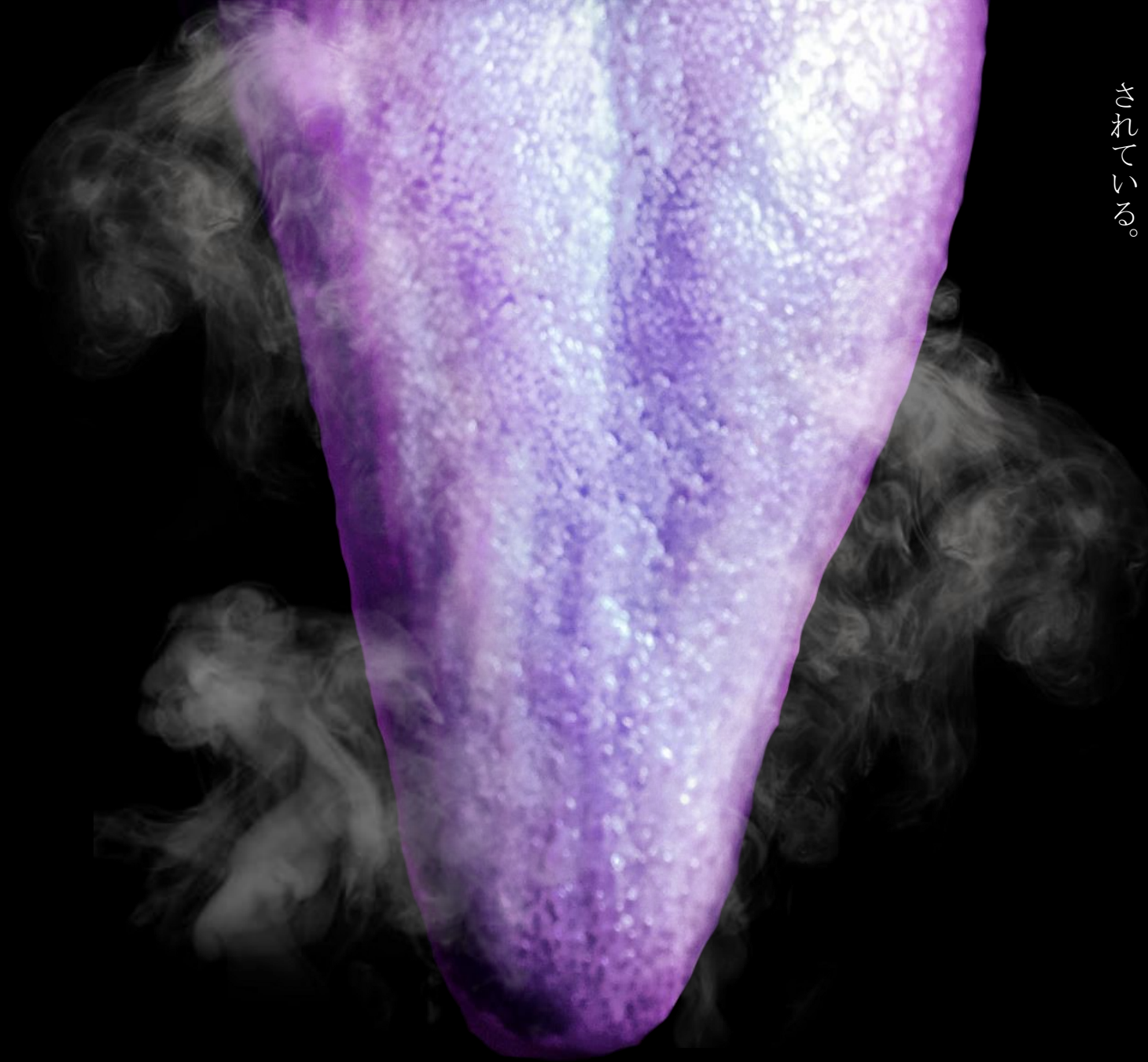
魔物が首を少しだけ反らし、青年の正面に顔を持ってきた。



「んべええええっ♡」

小さく可愛らしい魔物の口が開き、にゆるるっ、と這い出てきた。生き物のような「それ」は青年の顔の真ん前に垂れ下がった。「ひいひいひいっ♡」

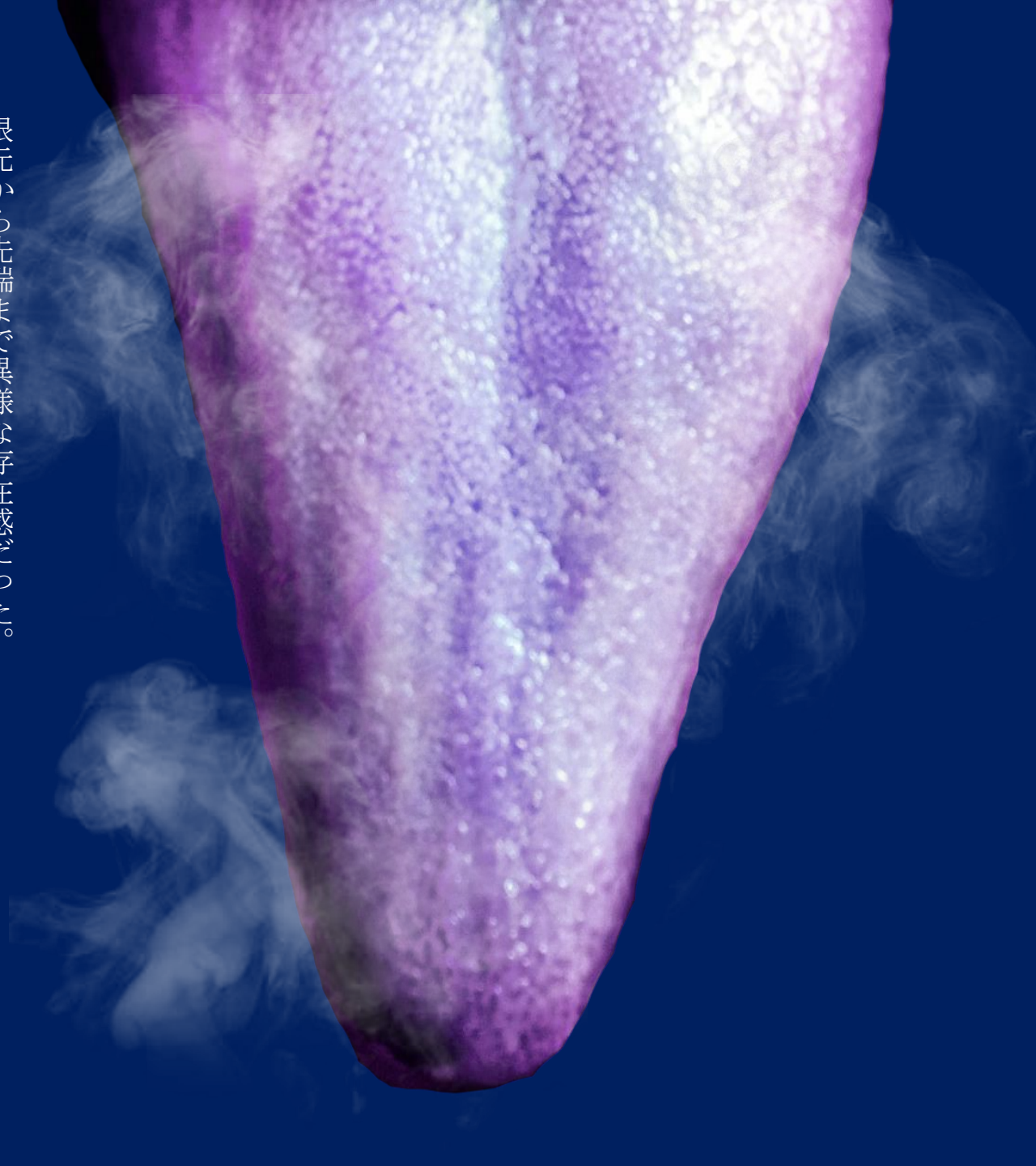
可憐な魔物の顔にあまりにも似つかわしくない。太く、長く、厚い舌。鮮やかな紫色が人間や通常の生物とは異なるということをはっきりと伝えてくる。細かく白い粒が立っていて、蜜のような粘液で全体がコーティングされている。



「この舌とお、握手をするの♡ 口の中でえ、べろべろっ♡」

青年の目は虚ろなまま、魅入られたように魔物の舌へ釘付けとなる。





舌に舌で触れ、交わらせるなどということは、強烈にお互いを愛し合う恋人同士か、夫婦といった、男女の仲でもこれ以上ないほど深い関係でないもあり得ない。いや、相手は魔物だから、そんな人間の常識など関係なく、本当に「握手」と同じくらいの感覚なのだろうか。思考が混濁する。その間も舌から目が離せない。

根元から先端まで異様な存在感だった。

全く想像できない。

どんな「味」がするのだろう。

想像だけで脳が爛れるようだった。

ぴりりと痺れるのか。それともとろけるほど甘いのか。

魔物の舌と口の中の空気がほのかに漂ってきた。生き物の濃い臭いがして青年は頭がくらくらした。



青年はもう何もわからなくなった。口の中の水分が全てなくなったように感じ、潤いを求めて勝手に口が開いてしまう。舌尖を突き出してしまう。

「クスクス♡ ありがとー♡ ほんとに嬉しい♡ 魔物に対する差別や偏見の無い、本当に友好的な人間ってことだね♡ 警戒心が全然無いことが、今の表情からすっごくよく伝わってくるよ♡ クスクス♡」

来た。魔物の可憐な顔が近づいてくる。そもそもその目的だった宝箱の事など青年の頭からは消え去っていた。迫力を伴いながら舌尖が近づいてくる。もうすぐ触れあう。異性と口づけなど一度もしたことがない。それが今日、魔物と、こんな洞窟で、こんなことが他の人間にばれたら、もう生きていけないだろう。しかしここは洞窟の奥で、誰の目も、法律も一切届かない――





魔物の舌の表面は粒高に、きめ細かくざらついている。その微細な起伏の一つ一つが、肌を合わせた時と同じように、青年の舌のざらざらと驚くほどぴったりと接合する。

ただ舌を口に含んでいるだけで青年は意識を失いかけていた。

そんな青年のことはお構いなしで、ゆっくりとかき回すように舌が動き始める。

ねちよっ……♡ ぐちよっ……♡

ザラザラ、ザラザラ♡

「んっ!? んん~~~~~!!!!!!」

青年の肺の中の空気が全て、鼻の穴から噴き出した。

舌と舌の凹凸が擦れ合う。

全身が怖気立つような微粒子の波長が脳みそへ流れる。

ザラザラザラザラザラザラ。

「んっ!? ♡ ♡ ♡ んっ! ♡ ♡ ♡ んんん~~~~~っ! ♡ ♡ ♡」

音があごの骨を伝わり、耳に響く。

魔物の舌にびっしりとあるザラつきが、青年の舌の粒一つ一つと擦れ合う。

くちゅっ……♡ ぐちよっ……♡

「ん!? ♡ んっ!? ♡ ♡ ♡ んん~~~~~!!!!!!」

ねちよっ ♡ ぐちよっ ♡ ぐちよっ ♡ ぐちよっ ♡

舌が快樂のヤスリで削られ、原形を失くしていくような心地がする。

もはやキスという次元ではなかった。

口の中で化け物に襲われている。

「んっっ♡!?! っっ♡!?! っっ♡!?! っっ♡!?! っっ♡!?!」

青年は激しくもがくが、魔物にしっかりと羽交い絞めにされ動けない。



そして青年も羽交い絞めにしている。

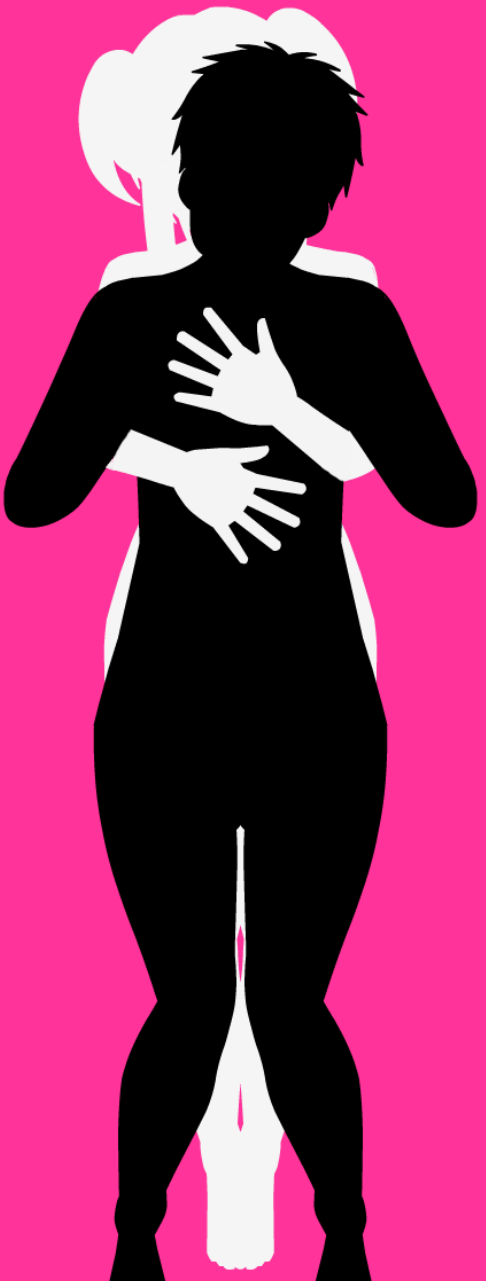
意識は必死で離れようとしているのに、体は逆に動く。指、手のひら、胸板、腹はべったりと、粘着しているかのように魔物の体を離れない。心は逃げたいと思っているのに、体はもっと味わいたいと無我夢中になっている。



嵐の中木にしがみつくように、青年は魔物の体に抱きついていった。はたから見れば熱烈に愛し合う恋人同士にしか見えない。

しかし口の中においては、恋人同士と呼ぶにはあまりに力の差が開きすぎている。青年はとつくに腰が抜けてしまっていた。まだ一分も経っていない。

口と口がぴったりと重なり、吐息も唾液も一切漏れず、激しく混ざりあっている。くちゅくちゅという音がずっと聞こえる。舌同士が擦れ合い、背骨が溶けるような心地も味わい続ける。



甘さに爛れた意識の中で、青年は一抹の不安を覚え始めていた。このまま続けられたら、頭が壊れたまま元に戻らなくなってしまうのではないだろうか？

それでもなお、青年はべったりと魔物の裸にへばりついてしまっている。

体の前面全てで至福を感じ、口の中で至福以上の何かを味わい続けている。





ひくっ ♡ ひくっ ♡ トロオ~~~~ ♡

青年は股間の部分がじんわり熱くなっているのを感じた。

一切刺激を与えられていない。性的興奮があまりにも高まりすぎて、軽い絶頂を起こしてしまった。

弱い勢いの射精は、まるで白旗を上げるかのようにだった。



十分以上が経過した。

もはやキスとしても長すぎる。長いだけではない。その熱烈さと濃厚さも嘘だと思いたくなる。

グチヨグチヨグチヨグチヨグチユグチユネチヨネチヨグチヨグチヨグチユ  
グチユグチユグチユグポグポヌチユクチユクチユグチユグチユニチヨ  
ニチヨグチヨグチヨグチヨグチヨグチヨグチヨ ♡♡♡

長い舌にリードされ口の中で踊らされる。おぞましすぎる音と感触が青年の頭の中で反響している。一生物の体験になる。



チヨロロロオ〜〜…♡ポトポト♡

鈴口がひくついて熱い汁が太ももをつたい、すねをつたう。今度上げた旗は黄色だった。「失禁」。おしっこを漏らした。

精液を漏らし、尿を垂らし、それでも魔物の体へしがみついている。友情とは最もかけ離れた形になっているが、青年はそれどころではなかった。脳が処理できないほどの非常事態を前に、全て後回しになるほど精神が完全に崩れてしまっていた。

三十分後。

もはや口の中は魔物とのキスの味しかない。

それどころか、これまで口にした全ての味の記憶が押し流されてしまった。

チュッポ♡ チュッポ♡ チュッポ♡ チュッポ♡

丹念に、巻き付かれて青年の舌が何度も執拗にしごかれる。

あまりにも入念にかき混ぜられたため、口の中が生クリームのようになっているのではないかと錯覚してしまう。



青年の目に光はなく、世界の果てに向いており、体もくにやくにやになつている。



ちゅぱっ♡ ずろろろおおお〜♡

ようやく舌がゆっくりと引き抜かれていった。

青年の舌が外に出た。しかし、舌全体が魔物の唾液に厚くコーティングされているため、外気の冷たさは感じない。

ねばあああああ〜♡

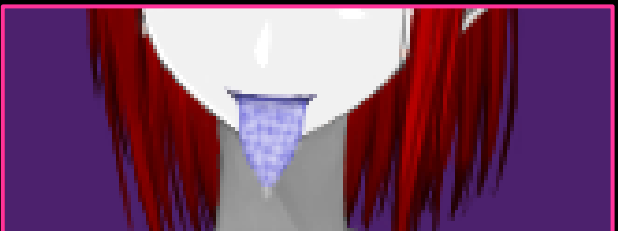
魔物の舌と青年の舌との間には運命の糸のように、粘り気のある糸が引いていた。あまりに太く、引っ張られる力すら感じる。

「……クスクス ♡

ねえ、また『最後のお願い』があるの ♡」

青年の意識は朦朧としていた。口の中にはまだ三十分間魔物の舌が蠢いていた感覚がへばりついており、耳奥にも残響が続いている。

しかし、魔物の声だけは脳の芯に直接浴びせられるように届いてくる。



「今、口の中いっぱい、温かくておいしそうなの『ミックスジュース』ができてるでしょう?」

青年の口内は、互いの唾液が舌によって何千回とかき回され、魔物の甘い息が含まれて泡立ち、練り上げられた、液体と固体の中間のようなネバネバの「飲み物」で溢れそうになっていた。

まだ十分に温かい。ホカホカと湯気が青年の口の隙間から立ち上っている。

その湯気がすぐ上にある鼻の穴に入っていると、臭いだけでさらに意識が遠のいてくる。甘く、生臭い香気。舌でシュワシュワと、きめ細かな気泡を感じる。

「どう？ 私たちが共同で作った『友情のジュース』だよ♡ その、口の中に最後まで残ったのが一番濃い一口♡ その分友情も濃縮されてる♡ ねえ、もちろん飲み干せるよね♡」

陶酔しきった意識の中で、それでも青年はうつすら恐怖を覚えた。

もし、こんなものを飲みこんでしまったら……♡

「ほら♥飲んで 一滴残らず飲みこんでえ♥」

こんなモノ、絶対飲んで駄目だ♥ 脳が警報を出す。飲んだら終わる♥  
飲んだら……♥ 青年が逡巡し始めた時――

「飲め♥」

耳穴に注ぎ込まれた魔物の声は、  
今までと全く別物だった。



脳を中心まで低く響き、ずっしりと重さを感じる。  
戸惑っているうちに、青年の体へ異変が起きた。

ぐくんっ♥

ためらっていた心の動きと裏腹に、喉が動いて口の中の汁を飲み込んでしまった。

人肌より少し温かい温度が喉を通り抜ける。粘り気が凄い。禍々しい塊が食道を滑り落ちて胃の底に落ちるのを確かに感じられた。

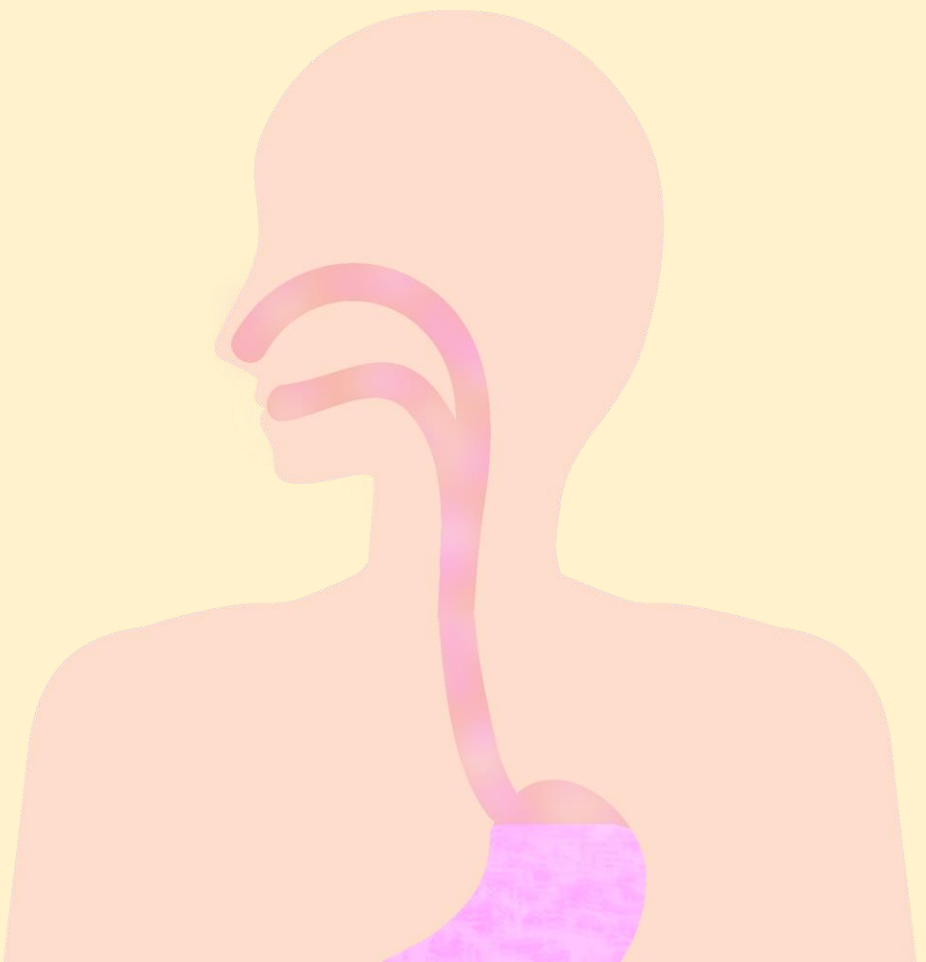


「ううっ……っ」

青年はうめき声を上げた。

たぶっ……っ♡ たぶんっ♡

胃の中はたっぷりの唾液で既に満たされており、そこへ最後の一押しとして特別に濃い一口が投入された。体内で水面が波打っているのがわかる。



舌にもずつと唾液の味、キスの感触がべつとりと染みついており、永久に取れそうにない。

げふっ  
♡

飲み終わって一拍置き、青年は大きくげっぷをしてみました。

熱い空気の塊が食道を上昇し、濃縮された臭気が通り抜けていく。

はっきり味すら感じるほど高密な空気。

風味も能弁だった。先程までの三十分間の、壮絶な舌と舌との交わりがフラッシュバックしてしまう。

ひくっ  
♡

視界が真っ白になり、陰茎の先端から精液とも尿ともつかない汁が一滴だけつうつと流れた。

「……クスクス♡ お粗末様でした♡」

立っている、というより、ただ力なく辛うじて地に足をつけ、奇的跡的にバランスを保っているだけの青年の体。

耳に、先ほど聞こえてきたのと同じ響きを持った魔物の言葉が届いた。

「右手を上げろ♡」

うつろな青年の意識の中にも沁み込んだ。



自分の横の空気が動いたのを耳で感じた。  
青年はほうけた表情で眺めるしかなかった。手が拳がっている。  
数秒して、それが自分の手であることがようやく青年にもわかった。  
意識して動かしたものではない。肩から下の筋肉が、脳を介さず、  
魔物の声による命令で直接動いた。

「……クスクス ♡  
**右手を下ろせ ♡**」



青年の右手は素早く、最短の動作で下に戻った。自分の体に何が  
起こっているか全くわからなかった。

「……クスクス ♡ 動作確認しゅーりよー ♡

じゃあ、連れて行くか ♡ **食事場所へ ♡**」

「前に歩け♡ 豚♡」

キスの余韻に体全てが浸っている。

下に視線を向けると、確かに足が前後に動き、歩いている。青年は全くそのことを意識していない。

青年の服も、短刀も、全て置き去りになっている。魔物はずっと後ろについて歩いており、先ほど一緒に歩いていた時とは別人のよう  
うに無言で、ただ指示だけを下している。

「右に曲がれ♡」 「左に曲がれ♡」 「その穴を這って進め♡」

声による操縦へ完璧に従いながら、さらに複雑極まる、狭く、暗い道を進んでいく。奥へ、奥へ――

とうとう行き止まりまでやって来た。

「よし、止まれ♥」

深海のような冷たさを感じる小さな空間。地面には土が露出して  
いる。

さっきの場所から一時間近く歩き、どこをどうやって通ったかも  
う全くわからない。自力で入口に戻ることは不可能だ。



「ようこそ♥ ここは寝床、兼、食事場所♥」

ダンジョンの魔物はこんな風に、他の人も、魔物も絶対に入って  
こられない場所に住処を作るの。主に食事中、誰も邪魔が入らない  
ように♥」

魔物の言葉と空間から発せられる冷気で思考が少しだけ冷え、青年はようやく言葉が話せるようにまでなった。

「は、ははらはこは……」

しかし未だキスによって舌がぐちゅぐちゅにとろけているため、活舌は極めて悪い。しかも喋るたびに胃から唾液ジュースの臭いが昇ってきて頭が真っ白になる。



「あ？ 何言ってるのかわかんねーよ♥ 『魅了キス』すると舌が回らなくなるのが欠点だな♥ かまわず始めるか♥」

「ははらはこ……」

「……ん？ ……待って待って♥ なんか面白いこと言ってね？♥」

青年からすると、もはやそれを手に入れたというよりも、状況が変わっていないということの、念のための確認をしたかった。弱々しく声を振りしぼる。しかし――

「……ふっ ♡ キヤハハハハハハ ♡

もしかして今お前、『宝箱』って言った？

まだ信じてんの！？ マジで！？ ♡ サイコーにウケるわ



キスで頭メロメロになったせいで、状況一個も見えてねーのかよ

馬鹿が ♡

お前は、騙されたんだよ！ ♡ 私に ♡ こんなことも言われなきやわかんねーのか ♡



「ふえ……え……?」

「もしかして、『友達になりたい』っていうのも今の今まで信じてた? キヤハハハ♥

んなわけねーだろバーカ!♥ お前らみたいな低能の、弱い、ゴミ以下の生物と友達になりたいって魔物が一匹でもいるかよ♥」

魔物の声はもはや別人という領域を超えていた。



下品で、言葉に一切の親しみも、優しさも込められていなかった。

「あー面白♥ お前みたいな大人の、頭ゆるゆるのバカはかなりのレアキャラだわ♥

よし決めた♥ 殺す前にちよっと騷って遊ぼっと♥」

「ほら、その土の上に仰向けになれ♥」

また青年の体はひとりでに動き出す。

部屋の中央部にある湿った土肌。直前まで行って膝を折る。

その地面が少しくぼんでいることに気がついた。青年の体がちよ  
うどすっぽり収まる大きさ。つまり人間の形に。

恐らく何人も同じようにここへ体を横たえたのだ。

「ひいっ！」

青年はまだわけがわかっていなかったが、不吉な予兆に短く悲鳴  
を上げた。

「クスクス♥ 寝心地良さそうでしょ？」

ちなみに、この部屋にはこれまで何十人も人間のオスが入ったけ  
ど、出て行ったのは一匹もないの♥ よっぽどこが快適だった  
んだろうね♥ クスクスクス♥」

青年は裸の体を仰向けにした。まず尻、次は背中へと、ほとんど泥に近い湿った土のひやつとした感触を感じていく。

暗い中うつつすらと天井の鍾乳石が見え、まるで牙のようだと思った。

「動くな♡」

その声の上から降ってきた瞬間、肩、股、手首、足首、全ての関節が蟻で固められたかのように寸分たりとも動かせなくなった。

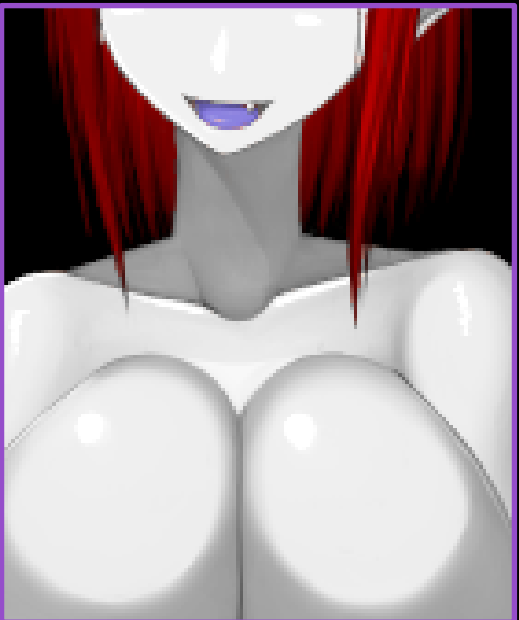


部屋の中は行き止まりであることを物語るように空気が停滞している。棺桶に閉じ込められているようだと言った青年は思った。

本能が、今すぐここから離れるべきだと告げている。

「サキュバスの唾液は、体の中に取り込むと、体がフラフラになって、  
脳が聞こえて来た命令に勝手に反応することになる♡ 今のお前みた  
いにね♡

魔物の体液なんて飲んだら終わりの猛毒しか有り得ないっていうの  
に、ほんと馬鹿丸出しだよねえ♡」





「あ♥ そういえば、初めて言うんだったよね♥  
私は『サキユバス』。

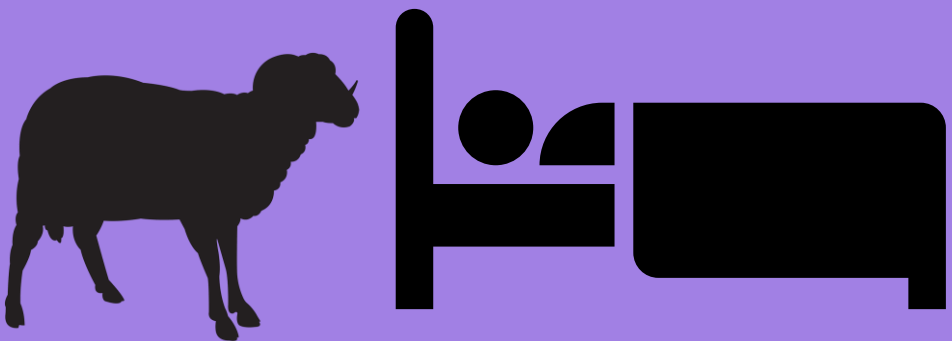
人間のオスの精気を啜り取る魔物♥

改めまして宜しくね♥」

「サキュバス」。

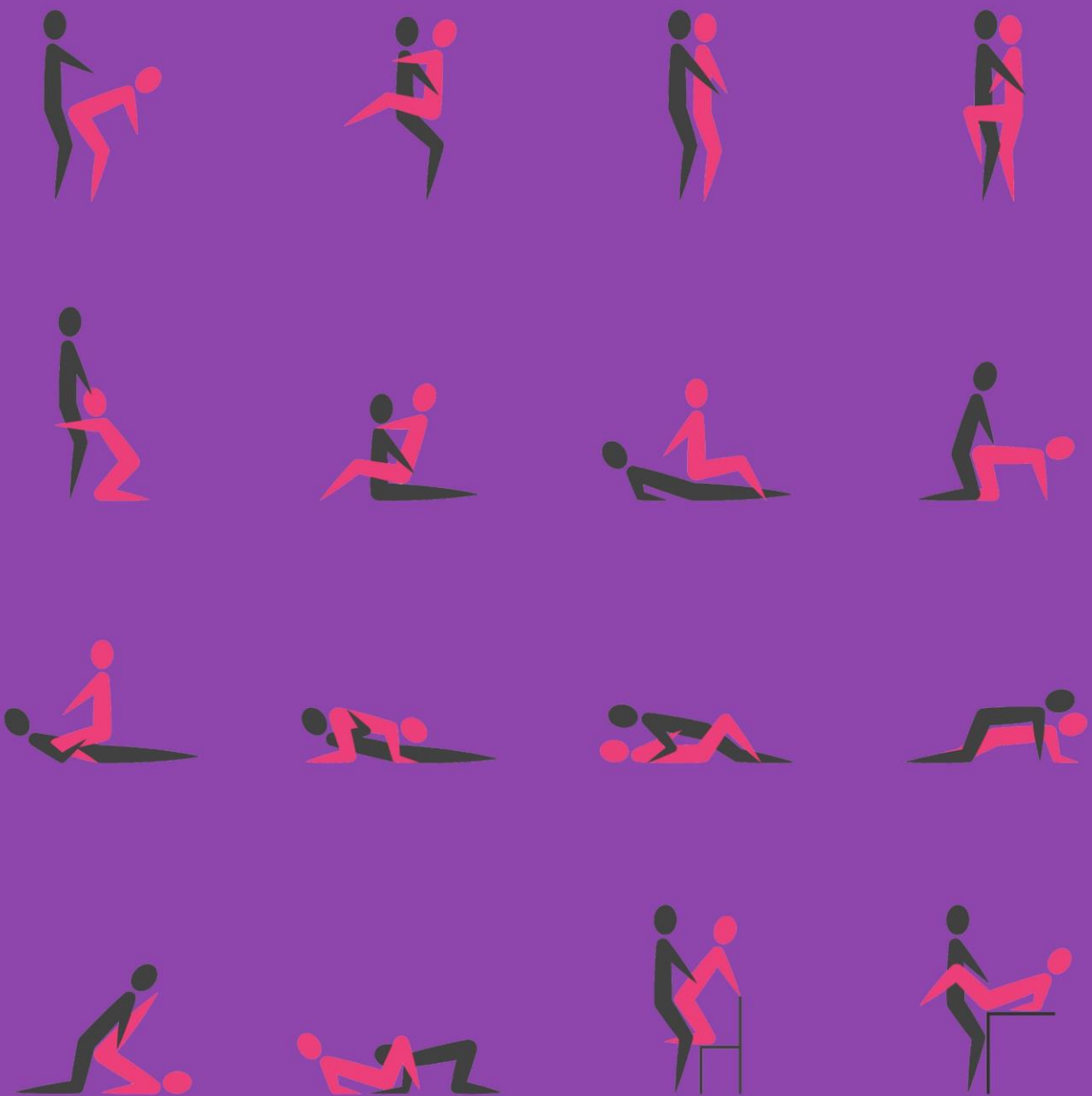
青年は聞いたことがあった。

夜になると寝ている男性の寝床に忍び込み、「精気」を吸うという魔物。



「私たちは『性交』で男の精を吸い取るの。」

「!?!?」



やっぱり、口や穴で『搾取』するのが一番楽かな。

人間の雄を視覚的に興奮させやすいから、そこが精液を奪う『専門』のところなんだよねえ♥」

話を聞いていくうちに青年の心に不安以外の感情が湧き上がって来る。

「…………ぷっ ♡ 期待してるのバレバレ ♡

ほんと、『知らない』って怖いよねえ♡ ……クスクス ♡

意味ありげに嘲笑するサキユバス。

「まあ、その『勘違い』は後で解消できるから、その時を楽しみにしておくとして……♡ もう一方の『耳寄り情報』を今から教えるね ♡

精気は生き物が持つ生命エネルギー。私たちはそれを、精液を媒介として吸い出し、糧とする ♡



「精気は元気な肉体を維持するために必要な力。若者は多く、老人は少ない。」

精気が吸われると、体がどんどん弱って、活力がなくなっていく。  
植物が枯れていくように ♡



体がやせ細って行って、肌から水分がなくなっていくって……♡」

「最終的には『骨だけ』になって終わり♥」

「!? え!?!」

「大体八時間くらい。ぴったり夜の中に全部吸い尽くせるようになってるの♥ よくできてると思わない?」

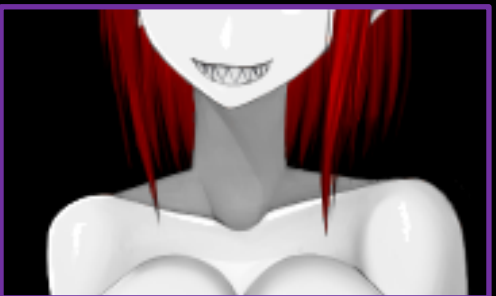


『八時間』。お前があと、どれくらいこの世にいられるかって時間だから、しっかり頭へ入れておいてね♥」

「……………!?!」

「クスッ♥ 死ぬんだよ、お前は。今説明してあげた通りに、私に全部の精気を奪われて♥

わかる? 死ぬの。この場で。今から八時間後に♥  
ちよっと遊ぶつもりだから、多少時間は延びるけどね♥



誰にも知られないこの場所で、私に弄ばれながら死ぬの♥

ちゅん♥ 合唱♥ どうか安らかに逝ってね♥」



青年は混乱した。

サキュバスは確かに「死ぬ」と言った。「しぬ」？ 誰が？

ここにはサキュバスの他に自分しかいない。

自分が死ぬという意味だろうか？

まさか。

そんな大事が、こんな何の身構えもしていない時に起きるはずがない。

今日はちよつとだけ日常から足を踏み出して、あくまで「下見」でこの洞窟に來ただけ。

やはり、何かの冗談の中にいるのでは……

「ああ……♡　ほんと、イイ顔してくれるわ♡

♡  
この状態から『お勉強させていく』のがたまらないんだよねえ♡

さて、それじゃあ私たちサキュバスの力がどういうものかってところから、ゆっくり教えてあげる♡

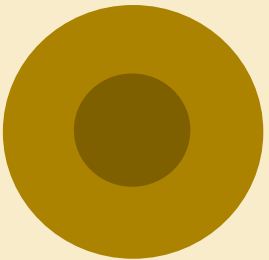
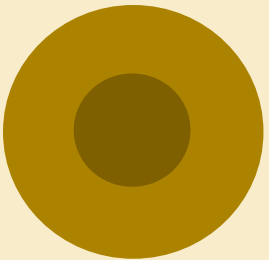
だって私たち、友達だもんねえ♡」



そう言いながらサキュバスは青年の体に近づいてきた。

サキュバスが膝を折り、身を屈め、顔を近づけてくる。髪をかき上げながら。

露になっている青年の、片側の乳首の上。



「『魔力』って知ってる？」

人間にとってはごく少数だけが使える『希少な力』だけど、魔物にとっては誰でも生まれながらに持つてゐるありふれた力。

自然の理に背いた方向へはたらく性質を持つ。

風のように飛び回る翼。無限に再生する体。鋼鉄を融かす炎。岩をバターののように断つ爪。

サクユバスって言うのは数は多いけど、数ある魔物の種類の中でも戦闘能力が最弱レベルでね……

ただ、一つだけ……人間のオスにとってはかなり都合の悪い能力が備わってるの♥」







魔物が口を開き、長い舌先を乳首に近づけてくる。

「ひッ!？」

青年は思わず悲鳴をあげる。

熱い吐息が乳頭に吹きかかる。それだけで胸骨が溶けるかのような壮絶な心地がした。

先ほど自らの舌で嫌というほど味わった「舌の感触」を思い出した。

あんなものが、もし……

「あ、ゴメンゴメン♥ さっきのキスはメロメロにして唾液を飲ませるのが目的だったから、かなり『抑えて』たの♥

今からするのは『攻撃』だから♥ 覚悟してね♥」

「…?」

ぢゅばっ!?!♡♡

「…?…?」

ぢゆるぢゆるぢゆるっ!?!♡♡  
ずぞぞぞぞっ!?!♡♡

「ひいひい」

いいひいひいひいひい!?!?…?」

青年は腹筋が千切れてしまわんばかりに叫んだ。



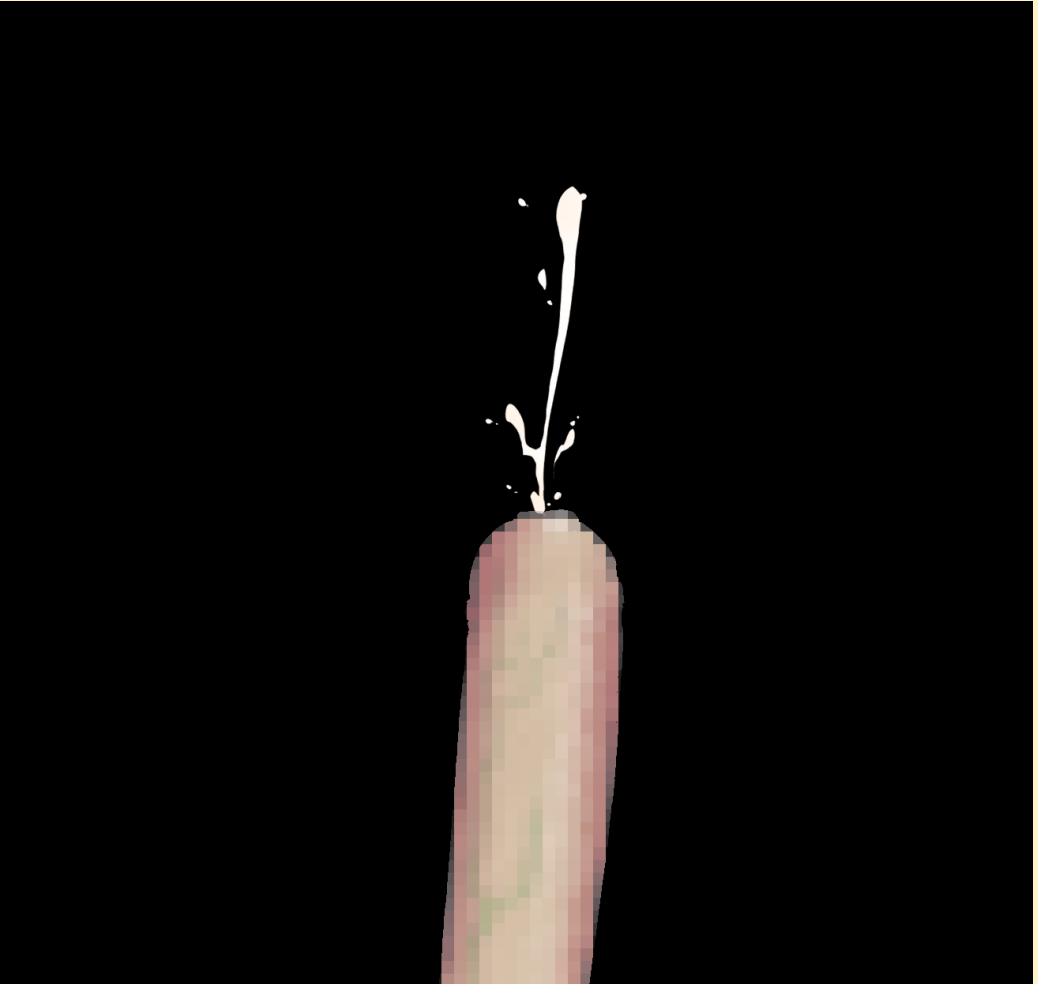


びゆるっ♡ びゅうう♡

その代わりに青年は射精した。

ペニスには空気以外何も触れていない。

脳が見えない力で潰され、屈服するかのように精液を放ってしまった。



ぱたぱたと熱い精液の雫が青年の腹に落ちてくる。

勢いが弱々しい。放出感がほとんど無い。陰茎への圧覚が無かったため、射精のための筋肉が正常に稼働していない。

とろとろとした、切ないだけの降伏吐精だった。

ぢゆるぢゆるぢゆるっ!!! ♡♡

引き続き乳首を吸引されり。舐め尽くしているサキュバスと目があう。「たったこれだけで何悶絶してんだ? ♡」という呆れも混じった冷酷な目。

自然界ではおよそ味わえない刺激だった。確かにサキュバスの舌は粒高でおぞましい表面構造をしており、舌の動きも熟練の娼婦のように高速で迷いが無い。



しかしそれだけでは説明がつかない。明らかに感触の凄まじさが非現実的だ。こんなもの人間や、他のどの生物の舌でも再現不可能だ。さらに触れているだけで魂が穢れるような不吉な感覚もひしひしと感じる。

思えばこれに似たような感覚は、最初にハグでサキュバスの体に触れた時も、キスをしている時にも感じていた。

べろべろべろ ♡ ♡  
ろろろろろ ♡ ♡  
ぢゅっ! ♡ ♡  
ずぞぞっ! ♡ ♡

びゅっ! ♡ ♡  
びゅるるるっ! ♡ ♡

耐えかねてまた射精してしまう。

ぢゅっ! ♡

ずぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞっ!! ♡

一層強く乳首を吸い立てられる。下品極まりない音色が狭い小部屋の中に大音響で鳴る。

あまりに凄いため、乳首の周りの皮膚が持ち上がってしまう。

そしてその状態のまま、真空状態のすぼめた口腔内で名残を惜しみ、「バイバ〜イ♡」と手を振るように舌先が乳頭を何度も何度も擦り上げる。

「んひ〜いいいい〜いい〜いい〜っっ!?!?!?!♡♡♡」



青年は全てをかなぐり捨てて悲鳴を上げた。本当であれば部屋中をもんどりうって七転八倒しているほどの刺激。

しかし、命令のまま指一本も動かせない。どこにも乳首の刺激を逃がせない。

びゅるるるるっ! ♡

代わりにまた射精してしまう。青年の腹の上はホワイトソースをまぶした鶏ソテーのようになってしまっている。



サキユバスが立ち上がり、虚脱状態の青年を見下ろす。  
床にへばりついた虫ケラを見るような目線。

「……クスクス♥ でも、大丈夫かなあ？ 今の優しい乳首責めで  
三連発でしょ？」

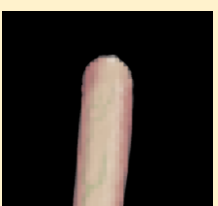
結構歴代の獲物の中でも稀にみる『早漏』♥

まあ、そっちのが楽でいいけどね♥」



サキユバスはニヤニヤと存在そのものを卑下するような笑みを浮かべる。

「友達同士の親切心で教えてあげるけど、そんなんじや後が辛いよお〜？ たっぷり地獄を見ることになるから♥」





「クスクス♡ 待ちきれなくなってきた♡ じゃあいよいよ本格的に遊んであげる♡」

サキュバスが青年の体を大股でまたいだ。  
また何かされる。青年は先ほどの衝撃の残響がまだ残る思考から、恐怖によって回復した。

鼻の骨が折れるほど顔面に拳をめり込まされた後で、もう一度拳を振り上げられた時と全く同じ目を青年はサキュバスに向け、体を一気に硬直させる。

「ぷっ♡ たったあれだけでそんなに怯えちゃってまあ♡



……こりや、とことん虐め倒すしかないわ♡

ほら、怖くない、怖くない♡」

「これから使うのはお待ちかねの場所♥  
哺乳類のオスならみんな大好きなところだよ〜?♥」

サキュバスは腰を落とし、青年の眼前に「それ」を近づける。

「見て見てえ♥」



グ……。パアアアア……♡

「んひいっ♡」

青年はなさけない悲鳴を上げた。しかしその声には怯えの他に、期待も含まれていることはサキユバスでなくてもわかっただろう。

サキユバスの、『陰部』が開いていた。

サキユバスは下着も身に着けていない姿だったため、最初からその部分は丸見えだったが、入り口はぴっちり閉じていた。



それが生きているかのようにひとりでに開いた。

おぞましくも鮮やかな紫色をしており、奥の膣壁まではっきり見える。

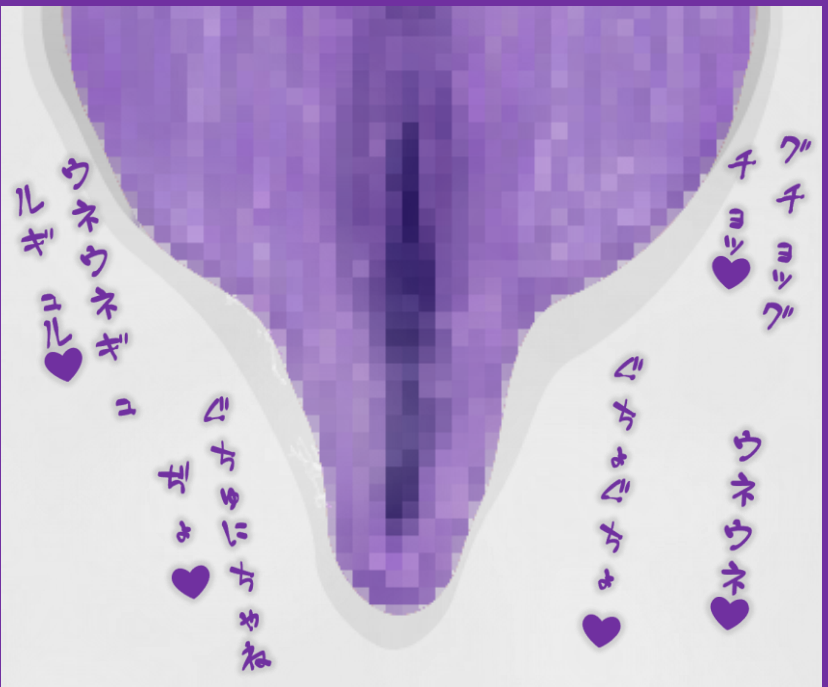
「いやあん♡ 恥ずかしいん♡」

入口がひくひくと蠢き、ヒダ壁がウネウネ妖しく波打っているのがわかる。複雑な動きだった。てらてらと表面が粘液で照り、穴の端と端が何本も糸を引いている。見ているだけで邪な感情を掻き立てられ、時を忘れてしまう。

さらに、真っ暗で見えない穴の奥から小さな怪音がずっとしている。

グデググチュニデュニデュネチヨネチヨググチュグチュ……♡♡

水飴の溜まった壺の中に何千匹も元気なミミズを入れて、しばらくしたらこんな音がするだろうと思った。



じくじく♡

青年は思わず、サキュバスにも間違いないくらい聞こえるほど大きな音を立てて生唾を飲み込んでしまった。

どう見ても用途は明らかだ。

「精を排出させるための穴」。

青年は、奥へ奥へ、親切に誘い込もうとしているかのようなヒダヒダの動きから全く目が離せなくなった。

「……………よつこらしよつと♡」

……………ぴたっ♡

青年が呆けているうちに、サキュバスが青年の上で腰を落とし、「入口」が陰茎先端の十センチ上で止まった。

「クスクス♡ よかったねえ♡ 今からエッチできるよ♡

……………女の子の形をした魔物と♡

残念ながら魔物にオスとかメスの

概念はないし、この『穴』も『性器』  
じゃなくて『吸精口』だけ♡

恥丘と陰唇の部分が

待ちかねているかのように  
何度も縮んだり開いたり  
している。

穢らわしい魔物の、最も穢れた  
部分。女の姿の魔物と交わったなど  
という噂が立ったら、  
一生他人から目を逸らされながら  
暮らさなければならぬ。  
それくらいの禁忌を犯そうとしている。

ほんのり陰茎の先が温かい。

「穴」の熱気が伝わってくる。



「ほら、オスにとっての小さなダンジョンみたいなもの♡ 冒険者になりたかったんでしよう？ 勇気を出して冒険してみよー♡」

穴がいよいよ近づき、むわあっと湿度の高い熱気が漂ってくる。

不安と僅かの期待により心臓が胸の中で跳ねている。

こんなものの中に、自分に備わっている器官の中で一番弱々しく、敏感な物を入れる……一体……♡



一年前、酒場の娼婦で童貞を捨てた時の、ただ一度きりの記憶を思い出す。

四十代くらいの、顔も悪く、やせ細った女の股についていた穴。

期待していたほど気持ちよくなることはなく、何だか緩くて、それでも興奮のあまりすぐイッてしまい呆れられた思い出がある。その一回きりの判断材料をもとに、衝撃に耐える心構えをする。

「はい、5、4、3、2、1……」

いよいよ粘膜と亀頭が触れ合おうとする。

「!?!」

触れ合う一瞬前、青年の中で時間が静止した。  
あまりに不吉な気配を前に青年の体中の毛穴が全て開いた。

グルルルルルルルル……!! ♡



気配だけではなく、獰猛な巨大肉食獣の唸り声までもがはっきり聞こえてくる。

氷水に落とされたように思考が急冷され、青年は生まれて初めて身の危険に対する本当の恐怖を感じた。

今、自分がペニスを咥えられようとしている「穴」は、自分の最も弱い部分を噛み砕いてぐちゃぐちゃにするような、とても凄惨なことが可能な機能を有している。





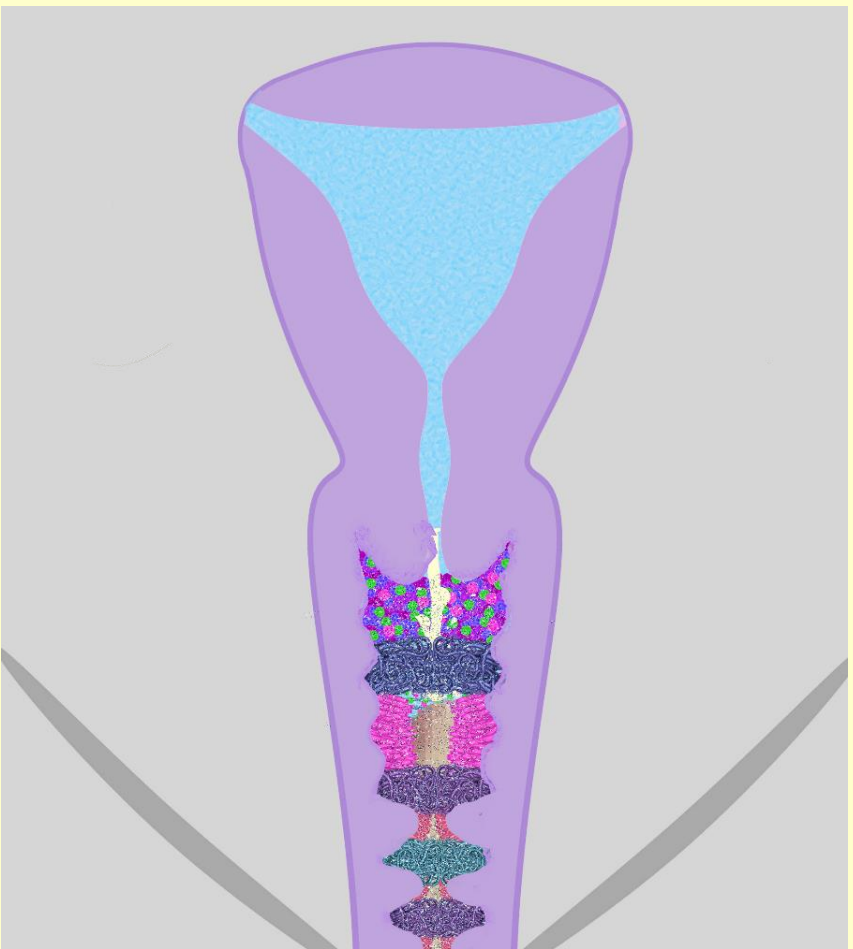


びゅるるるっっ!!!♡ びゅっびゅっ♡ びゅるるるるるるるるるるっっ♡

青年は射精した。

これまでの人生の中で一番の量。固形のような精液が尿道をにゆるにゆる出て行く。

「キヤハハハハハ♡挿れた瞬間にお漏らし♡



人間のメスなら興奮め通り越して、ドン引きだろうね♡」

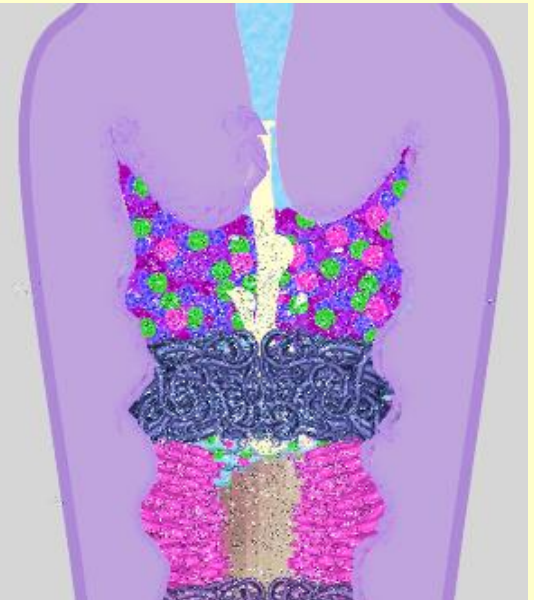
……

……?

青年は極限状態にある意識の中で違和感を覚えた。

頭がとろけるような射精の快感に混ざって、ほんの少しだけ、言い知れない不吉な感覚がある。

精通から幾度も幾度も、手淫で味わってきた、「通常の射精」とは違う感覚。



言語化が困難なほどわずかで、しかし決して無視できないほどおぞましい感覚に一瞬だけ戸惑う。



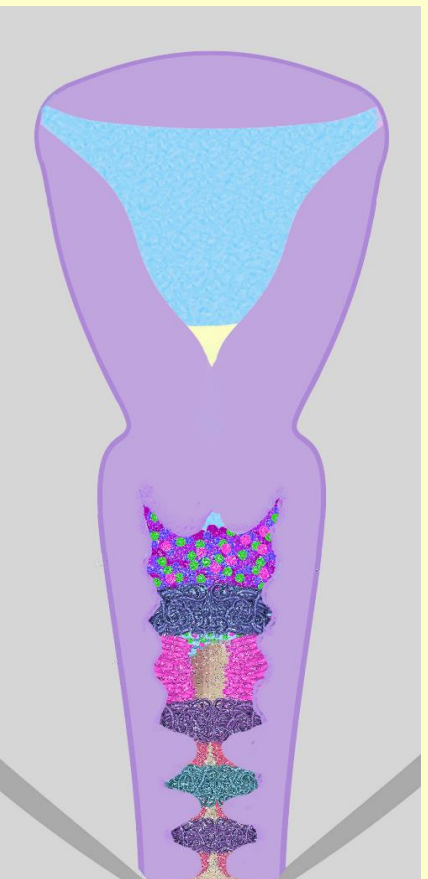
……「っくん」♥

「クスクス♥ 早漏精子、飲んじゃった♥」

精液は全て穴の奥の空間に消え、ペニスの周りにも、尿道の中にさえも、全く残っていない。

青年は恍惚のあまり、口が利けなくなっていた。

「……クスクス♥」

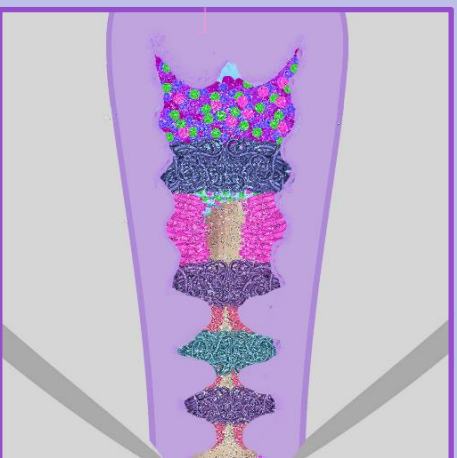


「どうしたのぉ？♥ 色んなことに目をつぶれば、『おマンコ』にいい、『中で射精』できたんだよぉ？」

射精は収まり、魔物も上に乗ったまま微動だにしない。

「お前もオスなんだから大好きでしょ？ 『マンコ』も『中で射精』も♥ クスクス♥」

魔物の体重は意外と重い。身長は青年より低いのに、多分体重は青年自身と同じか、それ以上ある。



丸みのある可愛らしいお尻が、どっしりと地面に下半身を押つけてくる。

「人間同士だったら犯罪になっちゃうかもよ？ ほら♥ いっぱい射精して、中ではかほかって、臭っさい湯気が立ち込めてる♥」

サキュバスが話す間も、肉洞内の感触が凄すぎて内容をあまり聞き捉えることができない。

ただ触れているだけなのに、肉壁からおぞましい感覚をひしひしと受け取る。

肉の筒は入口から奥までみっちり、ペニスを絡め捕らえている。中は何か所か「くびれ」のように狭い箇所がある。

「……ってか、小さくない？ 人間の平均に合わせたサイズの筈なのに、前半部分で止まってるんだけど♥」

挿れているだけで耐えがたい。正気を保ってられない。腰が浮き上がってきてしまう。

「あれでしょ？ おちんちんが小さいのって、人間のオスとしては劣等の印なんだよね♥ おまけに早漏って♥ クスクス♥」



まあそんな話の前に、そもそもお前って全然メスからモテないでしょ？

力も弱いし、その他諸々。何となく雰囲気でわかるんだよねえ、『劣った個体』♥ 『精子を欲しがられない存在』♥」

罵倒を受けながら、こみ上げてくるものを止められない。早く話が終わってほしいと願う。さっきしたばかりなのに。一ミリも動かれていないのに。ただの感触だけで――

「凶星だったあ？♥ あーん♥ 泣かないでえ♥ 大丈夫♥ 多分、広い世界のどこかに一匹くらいは……」

びゅっうううううううっ！♡ びゅるるるっ♡ びゅっびゅっ♡

「……え？」

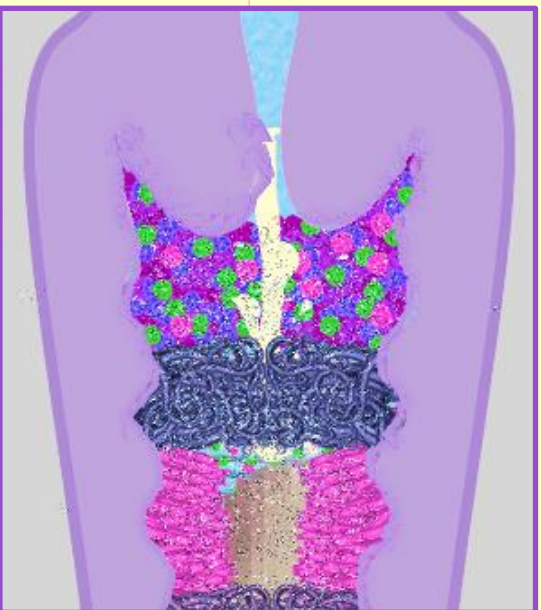
サキユバスは一瞬、呆気にとられた。その後で、自分の下腹部の中で温かみを感じ、起きたことを察した。

「……アハハハハハハ♡

イキやがった！ 一切動かしてないのに♡ ゴメンゴメン♡

訂正しとくね♡ 今はもう自信をもって言えるけど、存在しない

と思うよ♡ お前と子作りしたいってメスは♡ 一匹も♡」



この場から逃げ出したくなるほどの羞恥を感じながら、青年はまた違和感を覚えていた。

やはり、いつもの射精と違う。不吉な気配が尿道の中に僅かに残っている。

……じゅるるるっ！♡ じゅっ♡ じゅっ♡

「ひいっ！♡」

また精液が吸い上げられる。

抜けて行ったものを、飲み込まれる。不安が少しずつ強くなる。

「……クスクス♡ またまたどうしたのお？ 怯えた顔して♡ お前が勝手に漏らしたんだろ♡ バカ♡」



「……あゝごめんごめん。」

ちなみにねえ、私たちサキュバスは、人間っぽいのは外身だけで、中身は人間とも、他の生き物とも全然違うからね♡



そんな相手に射精してるって意識も、一緒に持っててね♡」





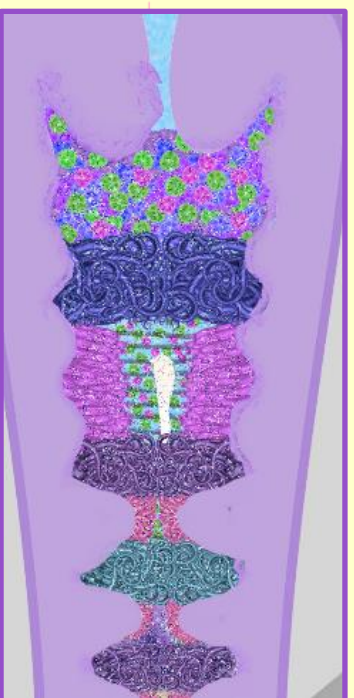
びゅっうううううううううっ！♡ びゅっ♡ びゅっうううううううう♡

「キヤハハハハハハハハ♡

応援してやったのに♡でも最高♡優勝決定♡早漏チャンピオンの誕生でえっす♡」

射精の陶酔感の後に後悔がやってきた。

我慢に我慢を重ねたのに、3回も射精してしまった。



恥ずかしさと同時に、この肉穴に対しての恐怖を感じてしまう。

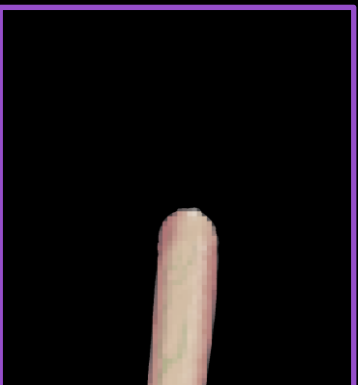
あきらかに人外の器官で、しかもペニスを射精させることに特化している。

ペニスを思い通りの目に遭わせてしまえる器具。まったく作動していないのに、その恐るべき機能の予兆が収めた瞬間ありありと伝わってきてしまった。

ぢゅっぽんっ♡

「……はい、やっと抜けた♡ 休憩タイムだよ♡ おちんちんに深呼吸でもさせたら？ 三回も射精してびっくりしてるでしょ♡ クスクス♡」

粘液にまみれた陰茎にひんやりとした外気があたった。

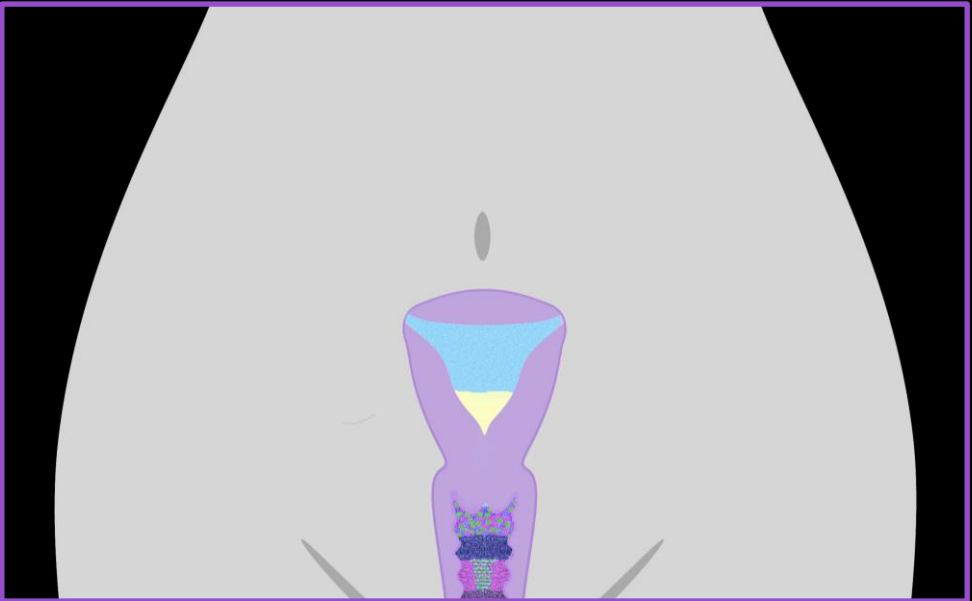


サキュバスの「愛液」はこのままこうしていても永遠に乾かないのではないかと思うほどべっとり陰茎をコーティングしていた。

ペニスにはまだくつきりと先程の肉洞の感触が残っている。

「……クスクス ♡ お腹の中で精液がちやふちやふ言ってるよお？  
♡ いやあん ♡ 孕んじゃうかもお ♡」  
サキュバスは下腹部をてのひらでさすりながら嘲った。

青年はサキュバスの吸精口のショックからは完全に立ち直ってはいなかったが、何とか思考を試みた。  
快樂の余韻だけではなく、射精の時に感じた違和感もまだ体に残っている。



「何か」が、射精と同時に体から損なわれている、気がする。

それも、何かわからないが貴重なものが。ほんのわずかではあるが――

サキュバスは青年を見下ろしながら語る。

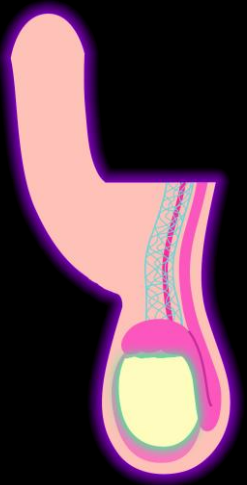
「勘の鈍いぼっくんでもわかったでしょ？ 今の3回が普通の射精じゃなかったって♡

もう一度説明するけど、サキュバスは人間のオスから精気を吸い取る。

精液に変えて、それを体で吸収するって方法でね♡

今お前が体感したのは、『精気が出て行った』感覚♡

そして出て行った分、再び睾丸いっぱい精液が補充される♡」



サキュバスの言う通り、睾丸がずっしりと重い。何日間も自慰をしていないときのようだ。

「ふつう、射精をすると脳が命令を出して性欲が湧かなくなる。尿道の筋肉も疲れて動かなくなる。

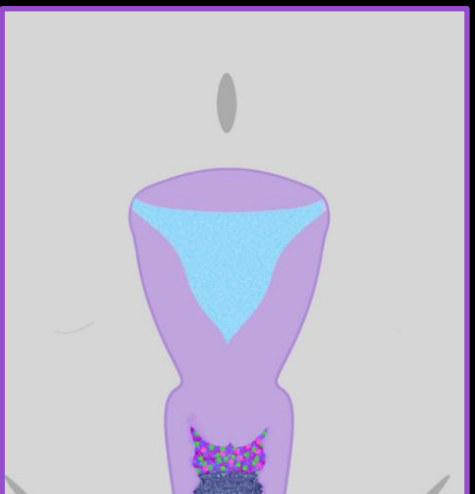
でも、吸精を受けている間、それらは『魔力』で妨害されて起こらない。催眠術をかけられたみたいに、無限にペニス射精できる

♡ 良かったね♡ 男の子の夢♡」

「『精気が精液に変えられる』↓『気持ちよくなる』↓『射精する』  
↓そして射精した精液は……」

シュワアアアアア……♡

サキュバスがお腹をさすり、ぞつとする笑みを浮かべる。



「『消化されて、私の栄養になる』♡ そして↓『ペニスは勃起した  
まま』↓『精気が精液に変えられる』っていうループ♡ 精気が空っ  
ぽになるまで♡

『精気』が減ると、病気にかかりやすくなったり、疲れやすくなつ  
たり、色んな悪い影響が体に出始める。

もっと減ると、体が変化し始めて……最終的にはミイラ化♡

三回射精したくらいじゃ、全然元気なままだろうけど……

八時間。回数で言うと……」



「八〜九千回♡」

それだけ射精すると、空っぽになって、死亡♡

それが残りカウント。今はマイナス3♡ あとはどれだけこの世に残れるか、お前のガマン強さ次第♡

がんばって♡ 聞いた話だけど、意志が滅茶苦茶強い人間のオスが十時間ねばって、朝になって助かったって例も百年に一回くらいはあるらしいよ♡

まあ、こんな間抜けしか入らない洞窟の、さらにどん詰まりみたいな場所だから、助けが来るまで射精をガマンし続けても先に寿命が来るかもね♡  
クスクス♡」

サキュバスが腰から上を折り、青年の顔をのぞきこんでくる。

「……さあ、そろそろ理解が進んできたかな？ 誰も助けは来ない。  
お前の体は動かない。」

お前は死ぬの。この場所で。

死体は誰にも見つからない♡ 墓も作ってもらえない♡」



「精気」が吸われる不吉な感覚を経て、頭に冷気が差しこんできたように、それにより状況を鮮明に理解できるようになる

「キヤハハハハハ！ イイ表情になってきたあ♡  
くだらないお喋りを長々とやったかいがあったってもんだわ♡



今ごろやっと真っ青になって、怯えた目をし始めたけど、理解できてるのはまだ一割程度♡  
もっともっと先を体験しないとね♡」

「じゃあ、遊びの続きを始めよっか♥」

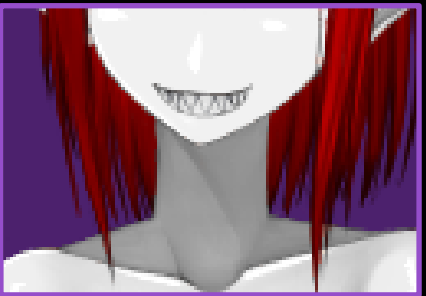
サキュバスがまたゆっくりと脚を折り曲げ、腰を下ろしてくる。近づいてくる。

サキュバスの股間が。さっきの、あの恐ろしい「穴」が。

もう期待よりも恐怖のほうが強い。まるで拷問器具が迫ってきているかのように思ってしまう。

青年の本能が警鐘を鳴らし、必死に体をよじり、逃げ出そうとした。

しかし体は動かない。指の第一関節をわずかに折ることすらもできない。



サキュバスが青年の両脇の地面に手をついて、蛙のような前かがみの体勢になる。狙いを定める。穴の入口が、陰茎の先端に。

「希望はゼロじゃないけどね♥ コインが一万回連続で表を向く確率もゼロじゃない♥ 早漏チンポに喝入れて、がんばって耐えてみてね♥」

……まあ、残念ながら『穴の中』が、さっきとはちよつと違う状態だけどお……ねっ!♥」

サキユバスはギロチンの刃を落とすように腰を下ろした。

にゆるっ！  
♥  
♥  
♥  
ぐちゅぐ

ちゅぐちゅっ  
♥  
♥



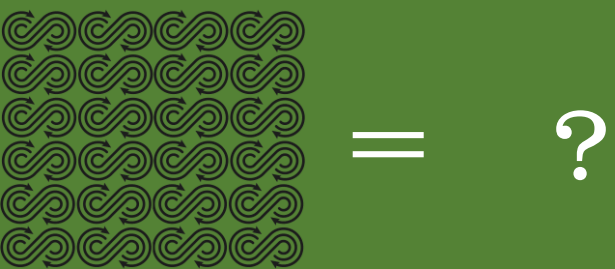


さらにその上、さつき三回射精した時に感じた、邪悪で不吉な力のようなものが何十倍にも強大になっている。

その力を、動いている触手の一本一本が纏っている。そうなるともはや何が起こっているか青年の脳では理解できなかつた。陰茎の先が肉の絨毯のざわめきで芯までごっそりと擦り溶かされ、無くなつたはずの陰茎が再び溶かされる感触を一秒間に何回も繰り返す味わわされる。

「はいはい。何にも知らない愚かな人間に、先生が授業してあげるねー♥

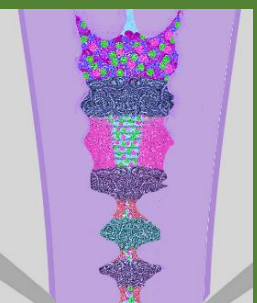
魔物の力は、それを込めた対象の機能を、『かけ算』で増幅します。



小石に込めて投げると、  
鋼鉄の塊を粉々にしたり♥

風に込めると、

町一つを跡形も無く吹き飛ばしたり♥



さて問題です。とっても複雑な魔物の肉穴に、魔力を込めてウネウネさせると、おちんちはどう……」





たった一度の吸精で、青年の心ははつきりと理解した。  
絶対に敵わない。

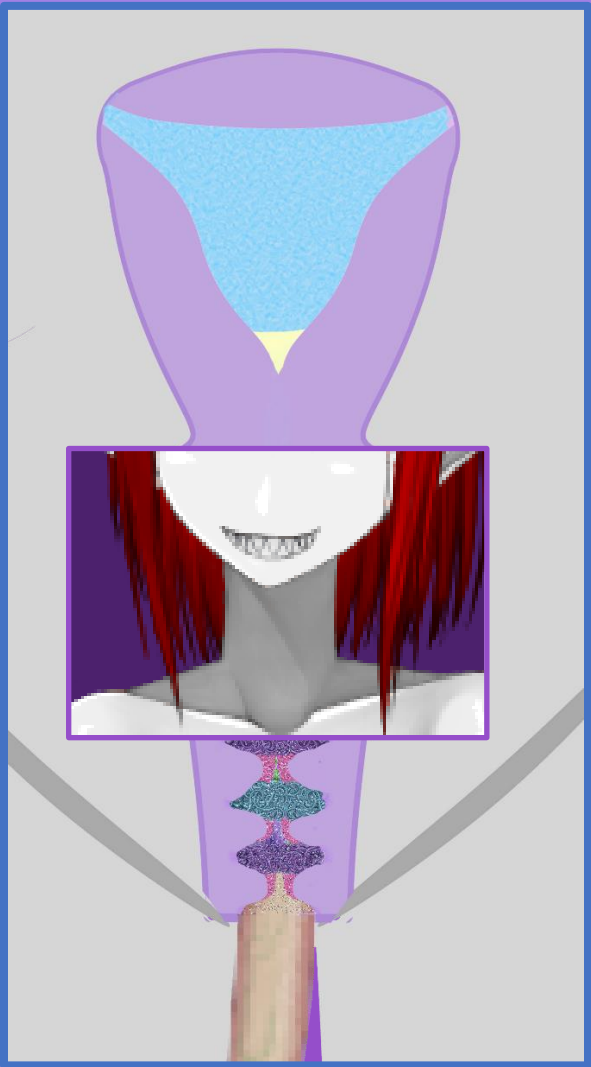
この「サキュバス」は自分がぬくぬくと暮らしていた世界の外側にいる怪物で、その最も危険な「捕食口」が今自分のペニスをがちりと啜えこんでいる。

怯えきった青年の目を見て、サキュバスはそれを見返して舌なめずりした。

「ぶっ。バカが。」

やっと視えてきたか？」

びゅっ♥ びゅっ♥ びゅっ♥



話の最中にもこらえきれず、射精してしまう。これ以上ないほど必死で耐えているのに。

「クスクス♥ だから、お前が早いのはもう十分わかったって♥  
何度も実証しなくていいから♥

ようやく理解できただろ？

お前は今、圧倒的強者に捕まって、遊ばれてるってわけ♥

私は今、神様と同じくらいの権限を持つてるんだよ。お前と、お前のそのちっさいペニスに対しては♥

サキュバスが語りながら、表面の肉触手をねっとり動かす。餡玉を温かい舌上で転がすように。

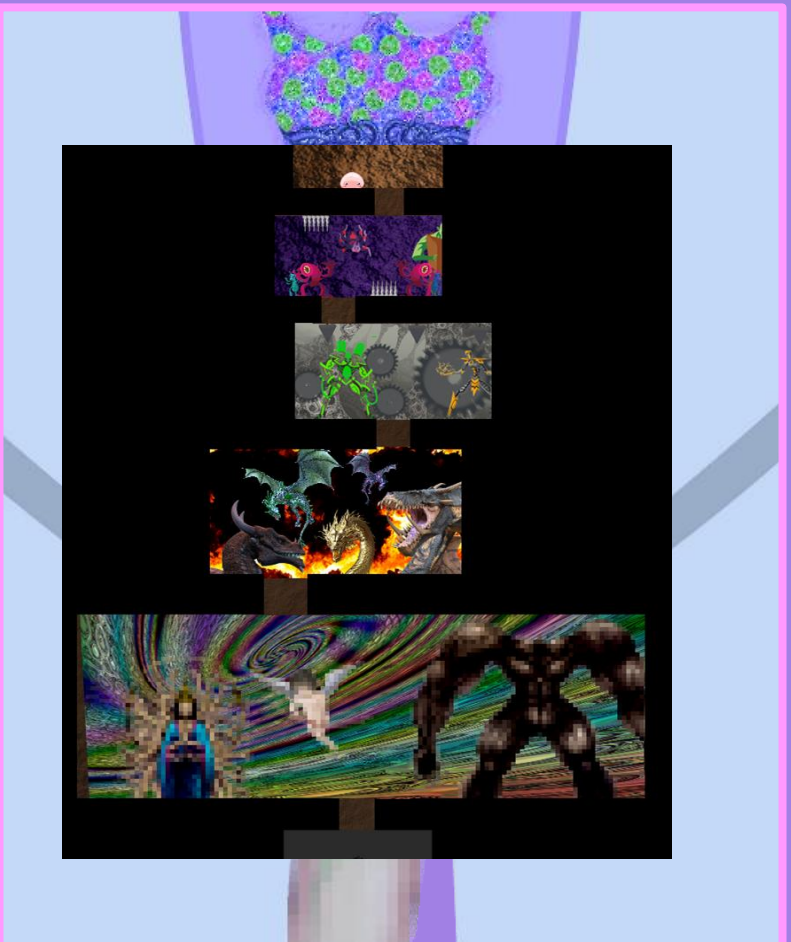
「iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ?!?!?」

青年は動かない体を何度も何度も振ろうとした。

「クスクス。いいこと教えてあげよつかあ？

サキュバスの肉穴ダンジョンは、奥へ進めば進むほど危険区域。数ミリ進むごとに、階層が上位の刺激を味わうことになる。

お前のチンポがひいひい鳴いてる『そこ』はまだ、獲物を優しいくく出迎える『地下一階』。



それなのに、全く太刀打ちできてない。クスクス。持ち主と同じだね♡

でもこの先には、もっと怖あゝい魔物と罠が待ち受けてる♡  
いくら泣いても喚いても、許してくれないような……ね♡」

恐怖を煽り立てるようなサキュバスの言葉。嘘ではないことがわかる。

亀頭の先の空間に異様な空気の流れを感じる。途轍もなく複雑で激しい。

処刑器具が動いている。目に見えない殺戮の蠢きが伝わってくる。青年は恐怖のあまり何度も浅く呼吸した。

「では、さらに奥へ……一気におちんちんの根元までどうぞ、お客様♡」

言い終わった後で、サキュバスの体重が下半身にかかった。みっちり  
りと啜えこまれた陰茎の表面が一ミリずつ奥へ滑りはじめる。

時間の流れが遅くなる。全神経を集中させ、ペニスに訪れる災害  
に備えるしかなかった。

「大丈夫大丈夫♡ たかが肉の穴♡

怖くない怖くない♡ よちよち♡ 奥へおいで♡ おいで♡」



幼児をあやすような言葉。果てしない恐怖の時間が迫ってくるの  
を感じる。亀頭一面に鳥肌が立つ。

「ほら、かっこいい『冒険者』さん♡ 勇敢に前へ踏み出そ♡ こ  
んな小さいダンジョンに、負けないで♡

今度こそ根性見せられるよね？♡

それじゃ、ファイト！♡」



びゅるるるるるるるるるるるるっ♡

射精したことすら覆われてしまう、膨大な量の刺激。

「キヤハハハハ ぜんっぜんダメでしたあゝ♡

それでも、チンポ小さいのが幸いして、地下50階くらいで止まってるけど♡

それじゃ、ダンジョンの道半ばで、ぐちゃぐちゃにされちゃってくださ〜い♡」

さつき地獄のように感じた入り口の触手絨毯が、今は安らぎの草原のように感じる。



初級冒険者のペニスは今、そこから先の本物の地獄にみっちり囚われ、数えきれない種類の壮絶な責めを受けていた。

知覚できるのはほんの一部に過ぎない。肉のリングが上下にぐちゅぐちゅペニスを扱きまくっている。その隙間で肉ヒダがウネウネとペニスを擦り溶かす魅惑の円運動をし続けていて、裏筋は一系列になった小さな舌のようなものにベロベロと上から下まで、徹底的に舐め回されている。カリ首は先端がざらついたイボ触手にじゅりじゅりしつこく、乾布摩擦のように擦られ続け、亀頭は長い触手の指のように枝分かれした細い触手から、クチュクチュ丁寧に「もみ洗い」されている。



グチユグチユグチユグチユグチユクチユクチユクチユクチユ

言葉を受け止める間もなく、ねばっこい「咀嚼」がまた始まった。触手、肉ヒダ、リングがまた一斉に射精をねだり始める。

「んっ、んあっあっ♡♡」

「クスクス♡ お前が無節操に放ってるその汚い汁は、分割されたお前の命♡ 出せば出すほど終わりが近づく砂時計♡」

びゅるるっびゅっびゅっ♡ ずぞぞぞっ♡ ぐっくん♡

「ぷっ。クスクス。話、聞いてた？」

「魔物に射精」。一回一回に深い後悔が起こる。何かが奪われる感覚に恐怖が高まり、泣きながらこらえようとする。



びゅるるるっびゅっびゅっ♡ ずぞぞぞっ♡ ぐっくん♡

それでも皆目太刀打ちできない。邪悪な肉筒。男の最も弱い部分があぐちやぐちやに蹂躪されている。粉末にされる小麦の気持ちを味わう。

「おい早漏。我慢するにはお尻の穴を『きゅっ』って締めるといいんだって♡ がんばれ、がんばれ♡」

弄ぶように肉穴が機能する。触れていると魂が吸われそうな魔肉。様々な仕掛けが唸りを上げる。ヒダがざわめいて思考を奪う。肉のリングがカリをコキ立てる。体の全ての筋繊維がほどけて、戻らなくなる。



びゅるるるっびゅっびゅっ♡ぢゅるるるるるずぞぞ

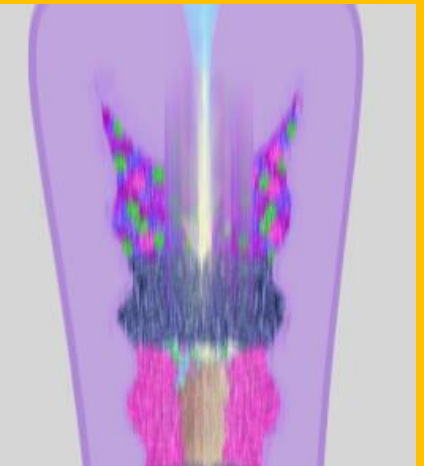
ぞぞっ♡

「あ~~~~~」

悪魔の快楽に屈したご褒美。尽きることない特濃精液の放出。ただしその後で、後悔と「啜り上げ」のおぞましい刺激がついてくる。「駄目だこいつ。こんなに根性無いんだったら、まだ『調節』はやめとくか♡遊ぶどころじゃなくなっちゃうし♡」

サキュバスは悶える青年を愉快そうに見つめていた。出会ったばかりの時間は、どうやってこの目を隠していたのだろう。

物体を見る目。



青年はここで初めて思い知った。骨の髄から震えが起こる。自分は虫ケラ扱いすらされていない。

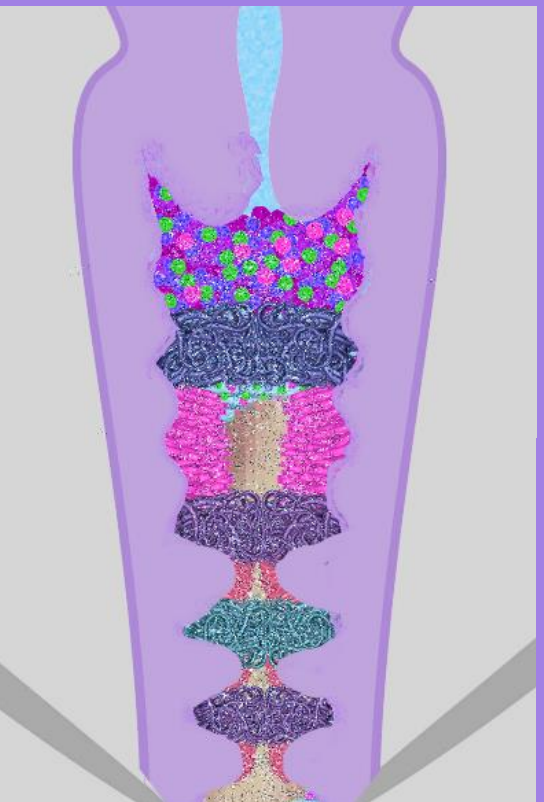
青年を「物」として見ており、正しい機能は「滅茶苦茶に壊して遊ぶ」ことだと心の底から思っている。

楽しみに細めている目の奥は凍えるほどに冷たい。

「それじゃ、ここで一旦休憩でええす♡」

吸精口の肉の動きがぴたっと収まった。  
静かな狭い肉穴に戻る。

それでも粘膜の感触は相変わらず凄まじい。ほんの少しでも気を  
抜くと無様に暴発してしまいそうだ。



「クスクス。それにしても……ほんと奇跡だねえ♡」

さっきも言ったけど、短小さなおかげで、吸精口の『最奥』には  
届いてない♡ 命拾い♡ ギリギリセーフ♡

今挿入ってるそこはまだ『安全地帯』。正気を保てる程度の刺激  
しか与えてこない。

本当に最悪な展開が待ってるのは、もっと奥♡ この先♡」

「想像してみてえ？」

その先は、逃げられないペニス、限界を超えて虐め尽くす恐怖の空間 ♡

待っているのは、今さっきの前半の責めが遊びに思えるくらい、地獄中の地獄みたいな快樂拷問 ♡

深いダンジョンの下層には人間が束になっても敵わない知恵と、力と、魔力と、残虐さを持った魔物がうじゃうじゃ ♡

『生きて戻れない』ことはおまけ。すぐに死ねたら至上の幸運。大抵はそれ以上の、最悪の末路ばかりが待ち受けてる。



この吸精口はそのミニチュア版 ♡

前半でギリギリ強情を保てた雄でも、『奥』に少しでも入ると一巻の終わり。

別人みたいに泣き喚いて、許しを乞いながら、射精して、射精して、射精して、そしてみんなこう思うの ♡ 『こんな目に合うんだったら、チンポなんて持たずに生まれてくれば良かった』って ♡

本当にラッキーだったね。短小チンポに生んでくれたママに感謝

♡

」

「ひいっ!!」

青年はサキュバスの言葉を聞きながら、確かに感じてしまう。

敏感な亀頭の表皮の先。

冷たく、邪悪な気配を感じる。棺桶の中にたっぷり詰まっている

空気のように。

きつと「この先」で、何人もの男性が「非業の死」を遂げたのだ。



ペニスが怯えきつてしまう。縮んで先端が「後ずさり」している  
ような心地がする。

本当に幸運だったのかもしれない。

先端の「気配」はサキュバスの言葉以上に説得力を持っていた。

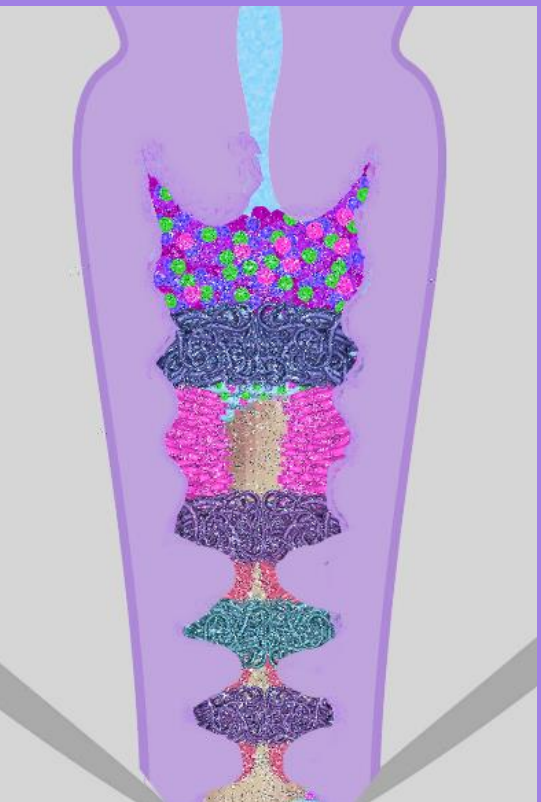
奈落へ落ちる崖の先端で辛うじて踏みとどまっている。

「クスクス。何安心してんだ、バカ。

この『前半部分』でも、お前みたいな早漏チンポだったら十分虐められるんだよ♡

さっきのが本気だと思ってんのか？♡ あんな目いっぱい魔力も

動きも弱くした『準備体操』で♡



まだまだ強く出来るし、それに加えて……まだ見せてない、男にとって一番有難くないサキュバスの吸精口の本領も見せてやるよ♡

それは刺激の『予測不能さ』♡」

「人間の感覚は、刺激に慣れていく。

どんなに苛烈な拷問も、同じ種類の痛みが続くと効果が半減する。

それを防ぐのが、この吸精口が持つ色んな『仕掛け』。

ダンジョンでいう多種多様なトラップ。

落とし穴。釣り天井。命がけの謎解き。人食い擬態モンスター。

どこへ何があるかわからない。



見えない危険への緊張が、あり得ないミスを引き起こす。

『あっ』っと声を上げた次の瞬間にはもう地獄の底の底。それもまたダンジョン探索の醍醐味。

この吸精口にも、たあ〜っぷりとそういう『仕掛け』が備わってるんだよお? ♡」

「じゃあ、こころで『探検ツアー』始めよっか♡

青年の恐怖と比例するように、嬉しそうな笑顔をサキュバスは向けた。

「最初は『三重高速回転リング』から。

しつかり勢いつけてえ……

さん、にい、いち、スタート!♡」













「上へ参りまあす♥」

ギュルルルツグチユグチユグチユ♥

「あ、あ、あ、あ、あつ!!♥♥♥ あつ!!♥♥♥ あつ!!♥♥♥ あつ!!♥♥♥ あつ!!♥♥♥」

回転しながら三つのリングが上へ動く。根元のリングは真ん中の位置。真ん中のリングはカリ首の位置。カリ首のリングは亀頭の位置へ。

鮮烈な快楽。耐えることなどできない。

ぴゅっ♥♥♥ ぴゅっ♥♥♥ ぴゅるるるっ♥♥♥

「下へ参りまあす♥」

下へ一センチ動く。位置がずれる度に、ガラ空きだったエリアに新鮮な刺激がもたらされる。

ぴゅるるるっ♥♥♥ ぴゅっ♥♥♥ ぴゅっ♥♥♥

例えではなく、これは本当の拷問だと青年は思った。

この刺激を受けながら尋問されたら、どんな秘密も洗いざらい話してしまうだろう。

ぴゅるるるっ♥♥♥ ぴゅっ♥♥♥ ぴゅっ♥♥♥

人生で味わった中で一番強力な刺激だった。

子供の頃、同年代の子供たちに必死でついていこうと木に登り、落ちて腕を折ったことがある。恥も外聞もなく、何時間も大泣きし続けたほどの激痛。

しかし、多分、今同じように腕が折れたとしても、多分痛みを感じない。

下半身の刺激が強すぎる。

ギューイイイイイイイイイインン♥

回転がさらに高速になる。音も、刺激も、繋ぎ目がわからない断続的なものとなる。

「~~~~~?!?!?♥♥」

もはや青年は声も無かった。

しかもリングは、回転しながら上から下へ、下から上へ、ゆっくりと、哀れなペニスを扱くように上下に移動している。

「ほらほら。どうしたの？ もっと楽しんだら？」

ぴゅっぴゅっぴゅっ♥

しかも今度は射精しても速度が落ちない。

もし体が動かさせたなら、青年は首をねじ切れるほど何度も横に振り乱していただろう。



しかし、魅了によって体は微動だにしない。

快樂がどこへも逃がせない。苦悶が倍增する。

ぴゅっぴゅっぴゅっ♥

ギューイイイイイイイイ~~~~ン♥♥

まだ速度は上がり続ける。

「ああ。こんなアホほど射精してたら、始まつちやうわよ？ 根性無いし、『多くなる』と思っただけど、こんな遊びの段階で、一発目かあ……」

呆れたようにサキユバスが呟く。

青年は意味がわからなかった。

しかし、変化は感じていた。





「ほとんどただの尿だから、精気も含まれてない。  
ただの水分。」

精気を吸い取ってる私たちにとっては、たまに起きちやうハズレ  
現象みたいな感じね。

食べられてるオスにとってみても、ただ辛いだけ♡  
お互いにとってデメリットしかない。  
全部根性がないオスが悪いんだけどね。

サキュバスの中には、『これ』を好んで何千回とさせまくるイジ  
メっ子もいるけど、基本的にみんな嫌ってる。私もね。



食事中に意味の無いことを起こされるとイラっと来るのよねえ。  
人間で言うとな果物に種が入ってる感じ？

だから、あんまりしないほうがいいよ？ 1回されただけでキレ  
てチンポに何時間も『拷問タイム』するサキュバスも多いからね。  
私は寛大だから2〜3回くらいなら許してあげないこともないけ  
ど」



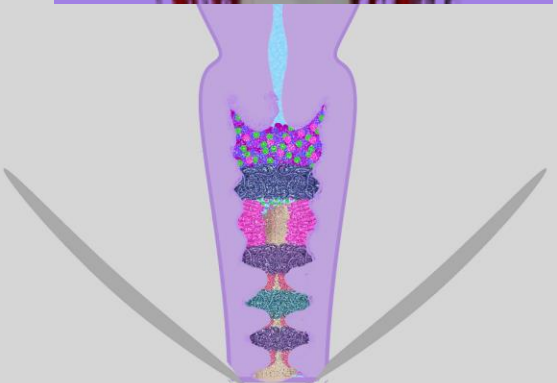
キュルキュルキュルキュル……

ようやく回転がゆるやかになり、止まった。

「じゃあ潮も噴いたし、この辺で終わり。

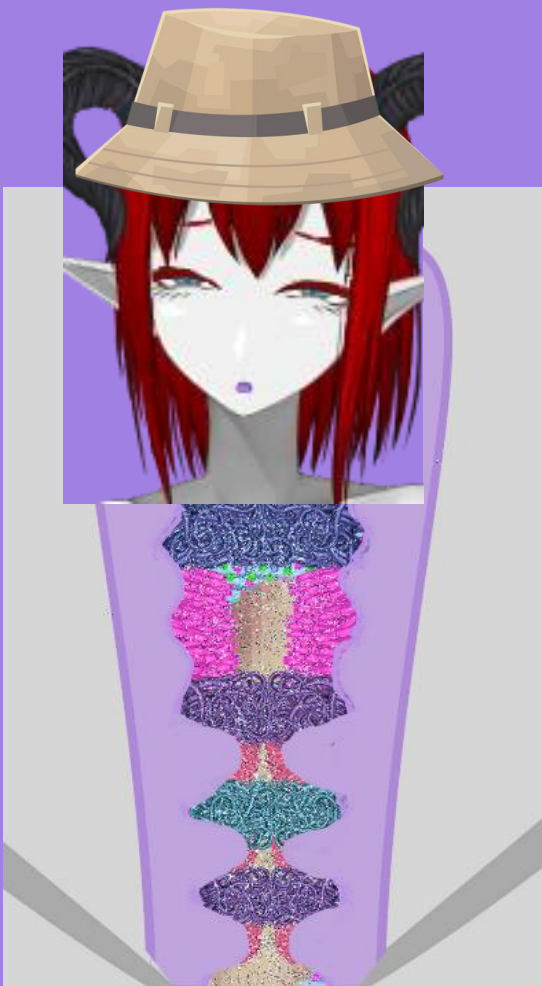
しっかしまあ、ほんと酷いわねえ♥

今まで何人も搾り殺してきたけど、十歳そこらの子供並み♥



あんまり早漏すぎるのも困りものなのよねえ。今みたいに無駄な潮が多くなるから。

今の回転の動きなんて、この搾精腔の数あるギミックの中でもかなりマシなほうなのに♥

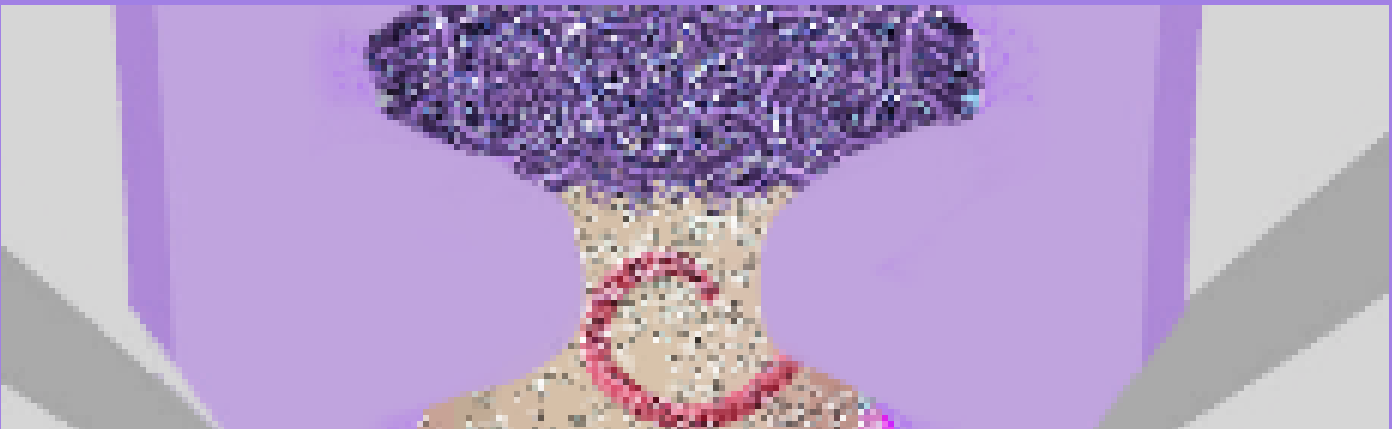


「じゃあ次、こんなのはどう？」

にゆるるるるるっ……ぴとっ

「……っ……っ……」

何か細長いものが伸びてきて、ペニスに触れた。  
触れた面積の小ささに反して、その感触は凄まじく大きかった。  
他のおぞましい肉壁や触手の感触が吹き飛び、『それ』のみを感じられるほどに。



受け取る情報は二種類あった。  
思わず思考がとろけ落ちるほどの性的快感が一つ。  
そしてもう一つは、生理的に、おぞましい生き物に触れてしまったという嫌悪感。

「今触れたでしょ？ この触手は特別な。  
他より強い魔力を帯びてる。

触れただけで、その部分の皮膚がトロトロに爛れたようになって  
ちやうでしよう？」

うぞうぞうぞにゆるにゆるにゆるううっ♡♡

触手が動き始めた。まるで生きているかのようだ。ペニスの表面  
をゆっくりと這いまわっている。

「クスクス♡ 動き始めた？」

魔力が高い分、代償があってね？ 私の意志であんまりコント  
ロールできないの。『待て』、『よし』くらいはできるけどね。

ペットみたいな感じ。



節の数も他の触手より段違いに多くて、自由自在に動く」

青年は畑でよく見たミミズを思い出した。ゆっくりとランダムに  
ペニスを這っている。一ミリ進むたびに気持ちよすぎて神経が削れ  
らるような心地がする。気持ち悪さも凄い。

「クスクス。どう？ 可愛いでしょ」



三十秒足らずの熱戦の末、軍配が上がった。

ぴゅっぴゅるるっ♡ びゅっびゅっ♡

「キヤハハハハ♡ あゝあ。負けちゃった。

ミミズ一匹より弱い雑魚♡ 確定でえくす♡」

触手はもつと射精をねだるかのようにウネウネ蠢いている。  
まるでペニスの上で勝ち誇られているように感じた。



「あー、笑った笑った♡ それじゃ、この子は引っ込めてあげるね。  
快勝おめでとう。巢にお帰り」

名残惜しそうに数回うねり、陰茎にうめきが漏れるような刺激を  
残した後で、触手は後ずさりしていき、肉穴のどこかへ引っ込んだ。

「可愛かったでしょー。名前つけようかなーとも思うんだけど、  
ちよっと『数からして』無理かなー」

みんなー、出ておいでー♡」



「やべつつつっ!! やつつつ!! やべでぐらひやい!! ゆっ、ゆっ、ゆっ、ゆるひでええええええ!!」

あらゆる思考をかなぐり捨て、必死に懇願する。目の前のこの、ミミズたちの主人が自分の生殺与奪権を完全に握っている。

「あははははは! いい感じ! ちょっとずつわかってきたね。自分の立場が。」

でも、お願いする相手が違うんじゃないかな?

ちゃんと『この子たち』にお願いしないと♡」

ミミズたちが待ちきれないと凶暴にうじゅうじゅうねっている。今はまだ全く触れていない。でも、こんな『大群』に襲い掛かられたら、終わりだ。



「ちゃんと一匹一匹にお願いしないとダメだよ? 性格も全部違うんだから。感触もそれぞれ微妙に違う。こんな『ミミズ地獄』におちんちん浸かっちゃったら、一体どうなっちゃうんだろぅねえ〜? ♡」

それに、精液はこの子たちにとってご馳走みたいなもの。おちんちんを滅茶苦茶にしてやりたくてうずうずしてる。ちゃんと心を込めてお願いしないと、絶対聞いてくれないよ〜? ♡」

「い、いやああああああ!!」

絶望の涙が青年の目から流れ落ちる。



「うーん……でも、ちよつとやりすぎになっちゃうかなあ」

サキュバスが呟いた。

「一匹でも耐えられず射精しちゃう激弱おちんちんだもんね。」

流石にやめとこつか。

可哀想だし、あと……心に負荷がかかりすぎると、射精できなくなっちゃうかもだしねえ……

知ってる？ 人間って、強いストレスがかかると、摂食障害や排

泄生涯みたいに、生理的な機能に悪影響が出ちゃうの。

だから不感になったり、勃起不全になったりも、当然起こり得る。



そうすると元も子もないから、大事を取って、やっぱりやめと

「うっ」と

触手の群れがゆっくりと遠ざかっていくのがわかる。

代わりに、青年の心へ津波のような安堵が押し寄せてきた。

絶体絶命の状況から、命が助かった。生まれ変わったような心地がする。

「ごめんねー、みんな。お腹。ペコ。ペコなのに——」

「なーんて♡」

ほらみんな、お待ちかねの『総攻撃開始』！

早漏チンポ、好きなだけ食べちゃっていいよ♡」



「…♡」



びゅ〜〜〜っ！♥ びゆるるるるっ！♥ びゅっ♥ びゅっ♥  
一秒も経過していない。ミミズの海の中へ射精してしまう。精液は隙間にゴボゴボと埋もれていく。

「バア〜カ♥ 何回騙されりや気が済むんだよ♥

確かに、ストレスが大きすぎると、人間は精神的な異常をきたす。だから、私たちの魔力はそれも妨害する。ホルモンに作用する神経の働きを著しく弱めるの。

私たちみたいに精気を吸い取る魔物や、人間を苦痛で長時間拷問するのが好きな魔物には標準装備の力。



こんな粘膜剥き出しの場所に長時間触れている状態なら、こっちに都合がいいようにいくらでも操作できるの♥ 弱い魔力でもやりたい放題♥

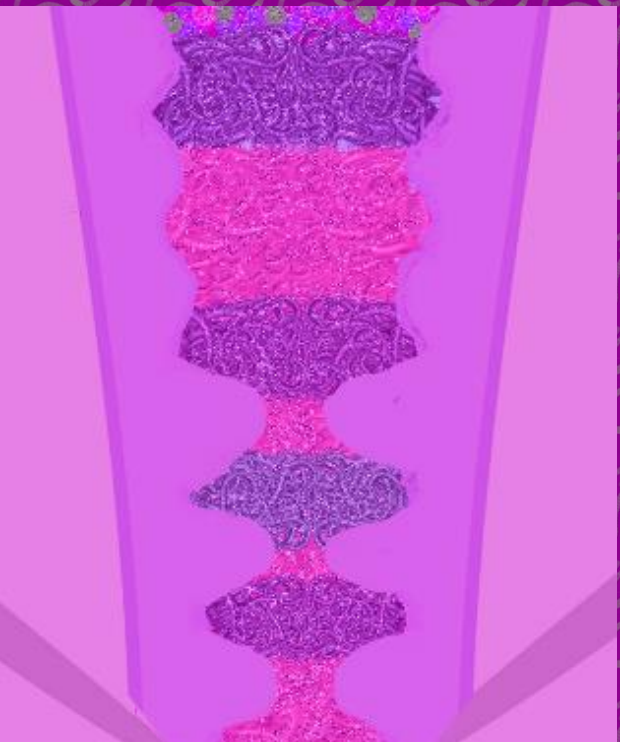
だからお前も、通常なら心が壊れてしまう快樂を受け取っても、失神も、退行も、発狂もできない♥

感謝してよね♥ ある意味私がお前の貧弱な心を救ってやってるってわけ♥「

青年はサキユバスの、恩を着せる話を聞くどころではなかった。  
最悪を超えた最悪。

触手は肉筒に満ちたまま、活発にうじゅうじゅと蠢き続けている。  
その感触たるや、全身の毛穴がパクパク開き、絶望の叫びを上げる  
かのようにだった。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅウニユウニユウニユウニユウぐちゅぐちゅニユ  
ルニユルニユル♡♡♡♡



嘘であってほしいと心の底から思う。

無数の小さな、イトミミズのような魔の生き物たちが元気いっば  
いに動き続けている。

刺激が洪水になっている。逃げられない。溺れるしかない。

しかし、おかしい。こんな途方もない量の刺激を受けると、ペニ  
スは跡形もなくなっているはずだ。そうならないとおかしい。

わけがわからない。人間が受け止めきれぬ刺激の総量を超えてい  
る。それなのに、受け取らされる。

びゅ〜〜〜っ ♡ びゆるびゆるびゆるびゆるっ ♡ ♡

射精する。その間も触手は蠢き続ける。

快楽が氾濫を起こしている。

『吸われている』不吉な感覚で、射精していることが辛うじてわかる。

「クスクスクス。もぐもぐされてびゅっびゅ ♡ ミミズの餌 ♡

人間の中でも、雌の名器が『ミミズ千匹』って呼ばれることがあるんでしょ？ ♡

でも、これとは比較にならない ♡」



びゅ〜〜〜っ ♡ ♡ びゆるびゆるびゆるびゆるっ ♡ ♡

「弱いペニスを這い回り回るウネウネ快樂地獄 ♡ ペニスを貪り尽くす凶悪ミミズの海。おちんちんも、心も、もう滅茶苦茶 ♡」

びゅ〜〜〜っ ♡ びゆるびゆるびゆるびゆるっ ♡

「ああ〜ん ♡ 可哀相〜 ♡ 雑魚精子ひっかけられてるミミズちゃんたちが ♡」

「サキュバスに捕まって、とおくつてもラッキーだったでしょ？  
こんな体験、人の一生じゃ絶対に味わえない。♥

味わってるのは快樂なのに、百人中百人が、『これを十秒味わう  
くらいなら、ペニスを切り落とされるほうがマシ』って答える♥」

びゅーっ♥ びゆるびゆるびゆるびゆるっ♥

「キヤハハハハ。つか、漏らしすぎだろ♥ ミミズへ餌やり、  
ご苦労様♥」



もう駄目だ。

耐えようとする意志すら湧いてこない。凶悪な大群のウネウネを  
一方的に受け取らされる

サキュバスの言った通り、本当にミミズの給餌係になってしまっ  
た。

ただただ暴れ回られ、栄養を与え続ける。

「ほい、みんな  
引っ込んでいいよ」

にゆるにゆるにゆる……とミミズが蠢き、壁面へ隠れていく。



「……………あひえ……………」

まともに口の効けなくなった青年は、ただただ、凄まじい食事の余韻に打ちひしがれているしかなかった。たくさんのミミズに耕された畑になった気分だった。

一体何発射精してしまったか、見当がつかない。

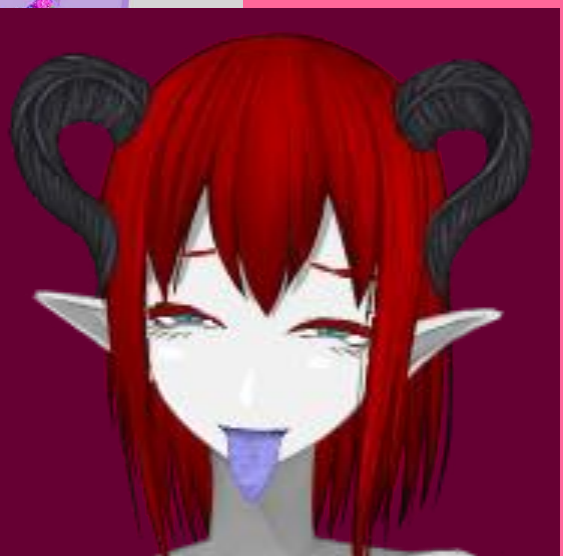
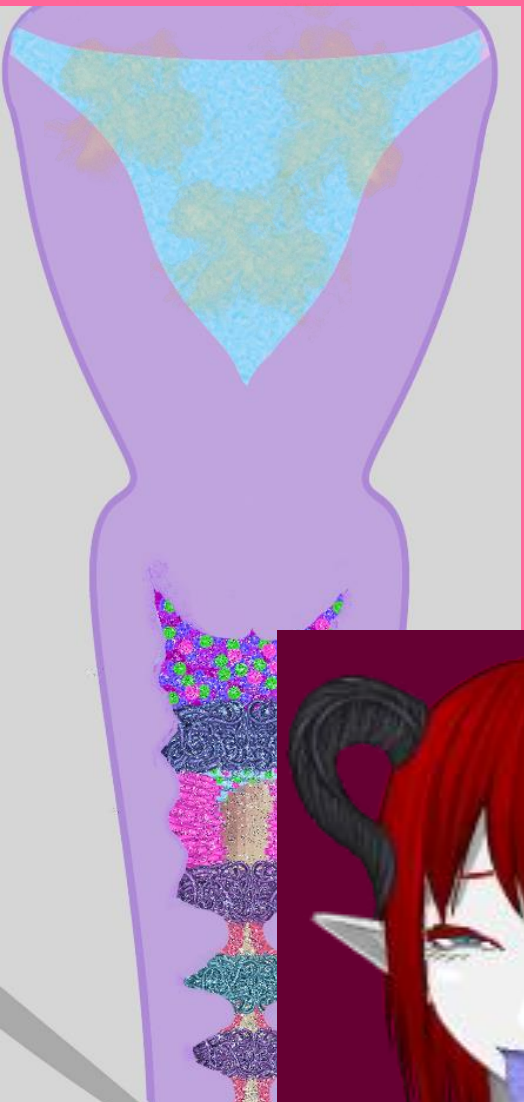


「はい、じゃあ消化あ〜♥」

シユワアアアアアアアアア……♥♥

奥で青年が放ったたくさんの精液の質量が「消滅」したことがわかる。

「ヒイイイイイ……」



おぞましい感覚だった。自分の出したかけがえのない生命の一部が、上に乗った魔物によって、確実に食べられことが伝わってくる。

「雑魚精子、喉ごしサラサラで、吸収しやすう〜い♥精子一匹一匹が弱い動きで、遺伝子が劣ってることがよくわかるよ♥

精子ちゃん♥怖い魔物に食べられてご愁傷様♥ド早漏のパパを恨んでね♥」

「それじゃ、次の探検に行ってみよっかあ ♡

ここからは、ちよおつと辛くなるけど、ご注意くださいあい ♡」

青年はサキユバスを怯えに満ちた目で眺める。

獲物を惑わすための可愛らしい容姿が、今はただ、ぞっとする。

中身が冷酷な化け物だということが、これまでの十分足らずの責めによって骨の髄まではっきりとわかったからだ。

「お前のためを思って、ここからは『訓練』をしてあげるね ♡



命がかかっているのに、ただの序盤の刺激で、馬鹿みたいにびゆるびゆる射精して ♡

でもまあ、人間の雌のおまんこすら碌に経験したこと無いんだろ  
うし、ちよつとフェアじゃないかなって思い始めてきちやった ♡」

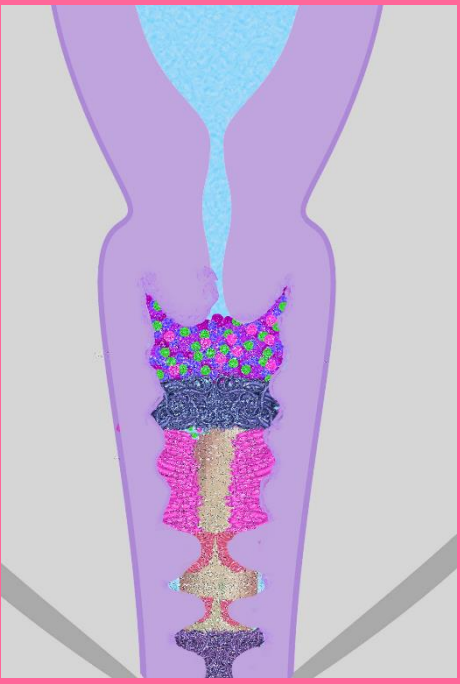
ニヤニヤと、サキユバスが青年の恐怖の視線を無視して、見下ろす。

「だから、きちんと『調教』して、早漏おちんちんを改善してあげる♥

感謝してよね?♥ これはお前にとって得な事♥

私にとってはただ食べ終わるのが遅くなるだけで、メリットなんて何にもないんだから♥

ミミズが引っ込んだ膣内に変化が起こる。



「それじゃ、命の恩人様が『矯正ベルト』をつけたげる♥

きゅうりううっ♥ と陰茎の根元が締まる。

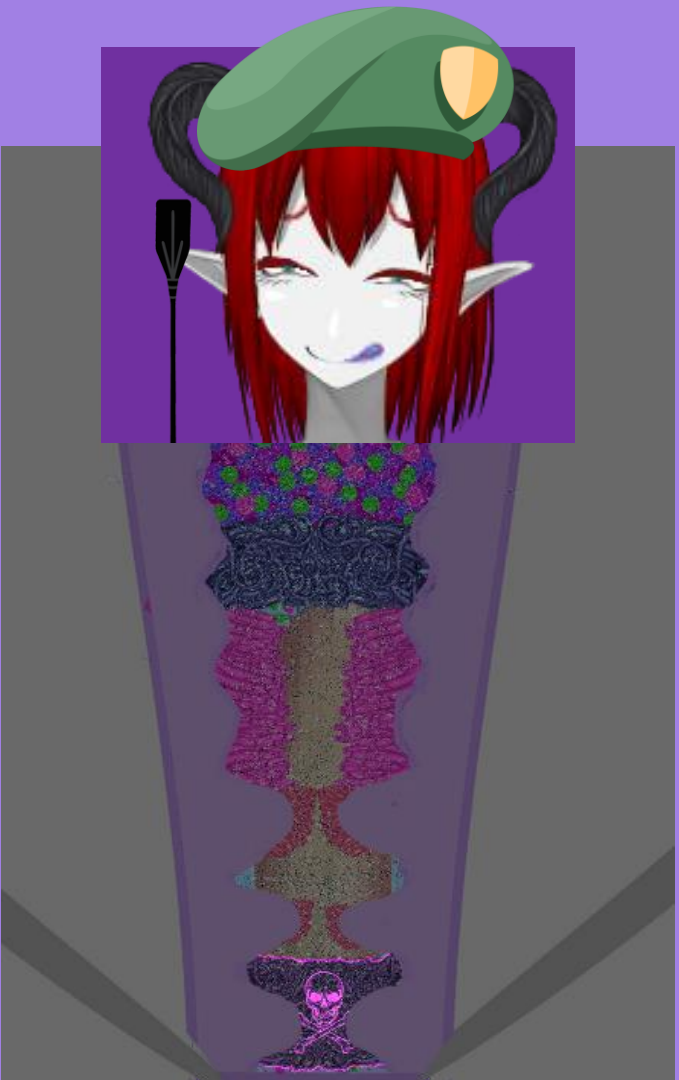
ねちやねちやした肉の「輪っか」が、青年の陰茎に巻き付いた。

……ブウン♥

「!?!」

根元の輪っかに、何か生暖かい、不気味な気配を感じた。

「それじゃ……始めるぞオラツ♥ 早漏三等兵♥



射精禁止の鬼プログラム♥ 涙も涸れるまでシゴキまくってやる  
からな♥」



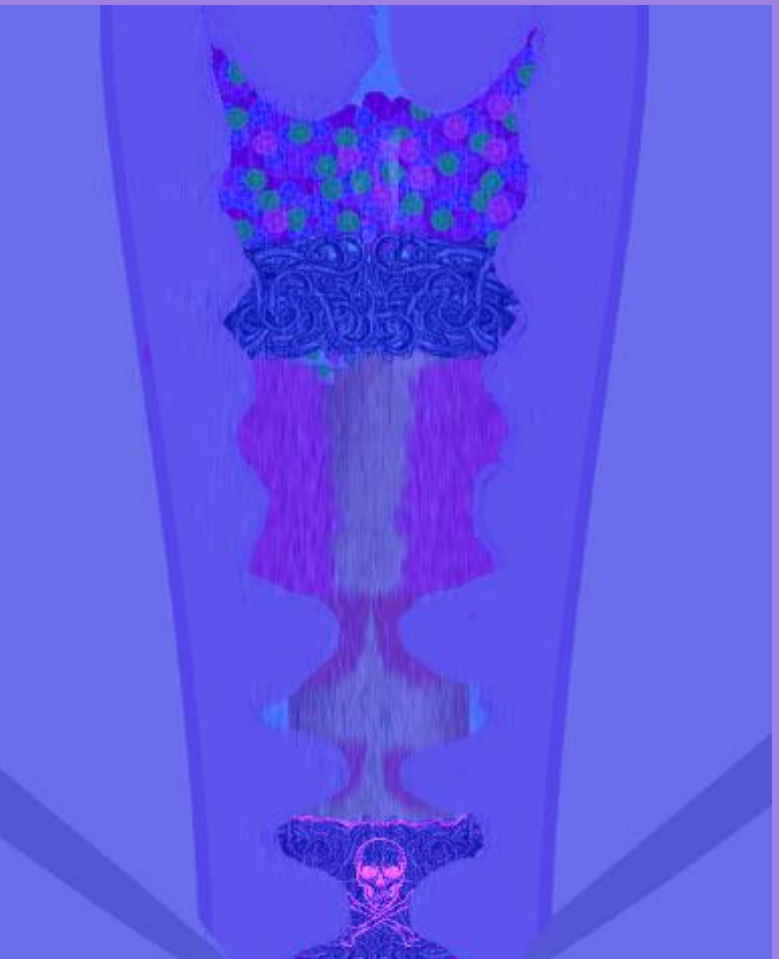
ひゅひゅひゅ♡☠️ ぴゅる♡☠️

「~~~~~♡☠️♡☠️」

射精できなかった。

最高に気持ちいい精液の代わりに、最悪に切ないカウパーが大量発射された。

体と頭は完全に射精の快楽に備えていたのに、起こるべきタイミングに、全く別の虚しい感覚が与えられる。



それは、ただ単にカウパーを放つのは全く異なる、悲惨極まる体験だった。

「~~~~~♡☠️♡☠️」

がくんがくんと頭を前後に振る。

「ぶっ♡ クスクス♡

……おいお前♡ まさか、気持ちよおしくびゆるびゆるう  
うううう〜と射精できるなんて思ってたわけじゃないだろう  
な!?!♡

まったく、あれだけ射精の危険を教えてやったのに、なんという  
駄目チンポだ♡ これは、徹底的に調教が必要だな♡



さっきも言っただろ？ サキュバスは、吸精口に挿れたペニスを  
完全に操れる♡

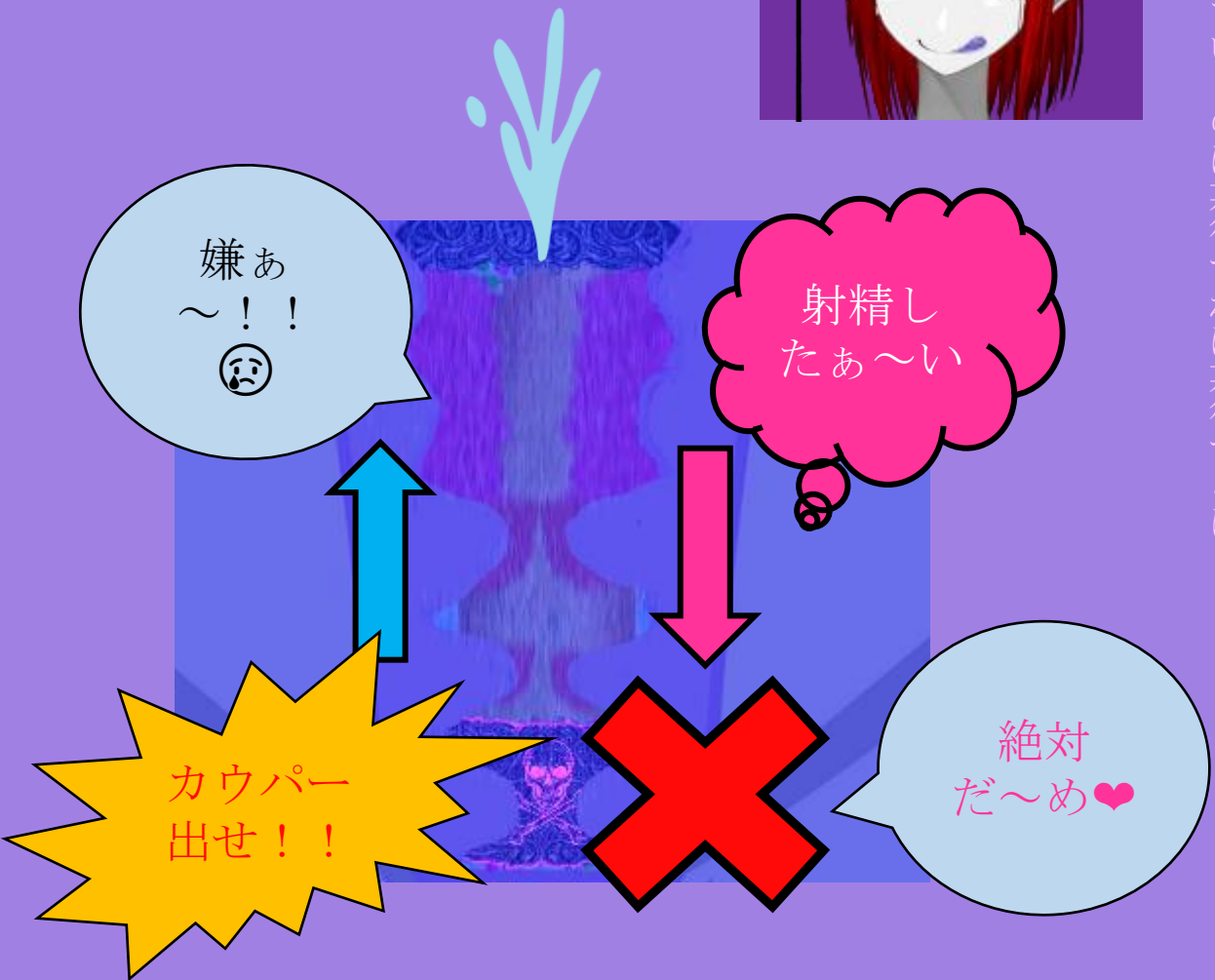
さっき根元に装着してやった『それ』は、魔力が籠った『矯正ペ  
ルト』♡「」

「これは、ペニスから射精の信号が送られると、それを全部、大量にカウパーを出す信号に切り替えてくれる優れモノ♥

悪意に溢れた交換手♥

カウパーは出しても出しても全く快感を伴わない、さらに雄を射精への期待に焦がすだけの液体♥

人間の脳っていうのは期待すれば期待するほど――



それが空回りした時の反動が大きい♥

もうわかったか?♥ これは、効率的な教育プログラム♥ 馬鹿みたいに射精しまくるお前に我慢の感覚を強制的に教え込ませると、射精すると逆に辛いことが待っていると刷り込ませる、一石二鳥の特別訓練♥





「あゝあ ♡ 残念 ♡ 射精できなかつたな ♡

それじゃ、事前説明は終わりで、訓練内容を発表する！ ♡

今よりもっと凄い運動をずう〜と続けて、十五分間 ♡ お前は  
透明な汗を発射しまくる ♡

「ひっ！ ひいひいひいっ！！！」



青年は怖気立った。今の二回だけで、もう金輪際味わいたくない  
と切に願うほどの体験だった。

十五分なんて続けられたら心が持つわけがない。

「……ああ？ 上官の言う事に口答えか？

よしわかった ♡ 倍の三十分に変更だ ♡ しっかり躓けてやるか

らな ♡

始まった。最悪の訓練が。

ウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネウネ

ひゅっ♡💀♡💀♡💀 ひくひくっ♡💀♡💀♡💀

こんなにしつこく、逼真に射精をせがまれているのに、一滴も射

精させられない。ペニスへの詐欺罪。

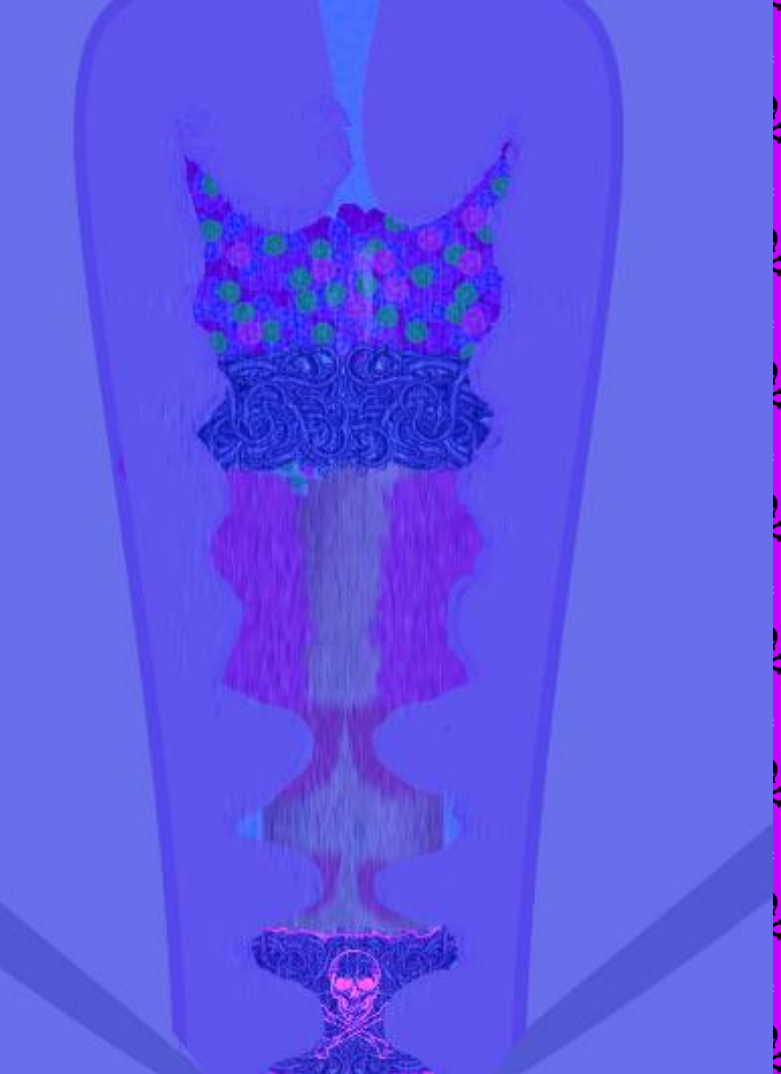
「オラッ♡ もつともつと『水』だけ出せ♡」

ひゅっ♡💀♡💀♡💀 ひくひくっ♡💀♡💀♡💀

鈴口が、溺れかけているようにパクパクと喘ぐ。

「オスが味わえる感覚の中で、一番情けなくて、切ない感覚♡ 存

分に味わえ♡」



精神をどろどろに溶かされるような肉壁のうねりの中で、透明な

液体だけを何度も何度も連射する。

ひゅっ♡💀♡💀♡💀 ひくひくっ♡💀♡💀♡💀

「ほら♡ ころやっつてカリ首のところをうそっぞと擦られるとたまら

ないだろっ♡

でもお前が出せるのは虚しいカウパーだけ♡

これを根元の『お助けリング』無しでできるよう、特訓、特訓

「

ひゅっ♡💀♡💀♡💀 ひくひくっ♡💀♡💀♡💀

ぴゅっ♡♡♡♡♡  
ひくひく♡♡♡♡♡

ぴゅっ♡♡♡♡♡  
ひくひく♡♡♡♡♡

ぴゅっ♡♡♡♡♡  
ひくひく♡♡♡♡♡

透明な水出せ♡  
水出せ♡  
水水♡

「頑張れ♡  
負けるな♡

「泣くな！♡ 私だって辛いんだ♡  
うやってたっぷり、愛のウネウネを加えてやってるんだ♡  
だが、お前のためを思って♡」

ぴゅっ♡♡♡♡♡  
ひくひく♡♡♡♡♡

グチュグチュグチュ♡グチュグチュグチュ♡グチュグチュグチュ♡  
グチュグチュグチュ♡

男らしくない！♡ 罰として中の運動の厭らしさを倍増だ♡

「……あ？ 何絶叫して、号泣してんだ？」

くっ♡♡♡♡♡  
ぴゅっ♡♡♡♡♡  
ひくひく♡♡♡♡♡  
グチュグチュグチュ♡グチュグチュグチュ♡グチュグチュグチュ♡  
グチュグチュグチュ♡



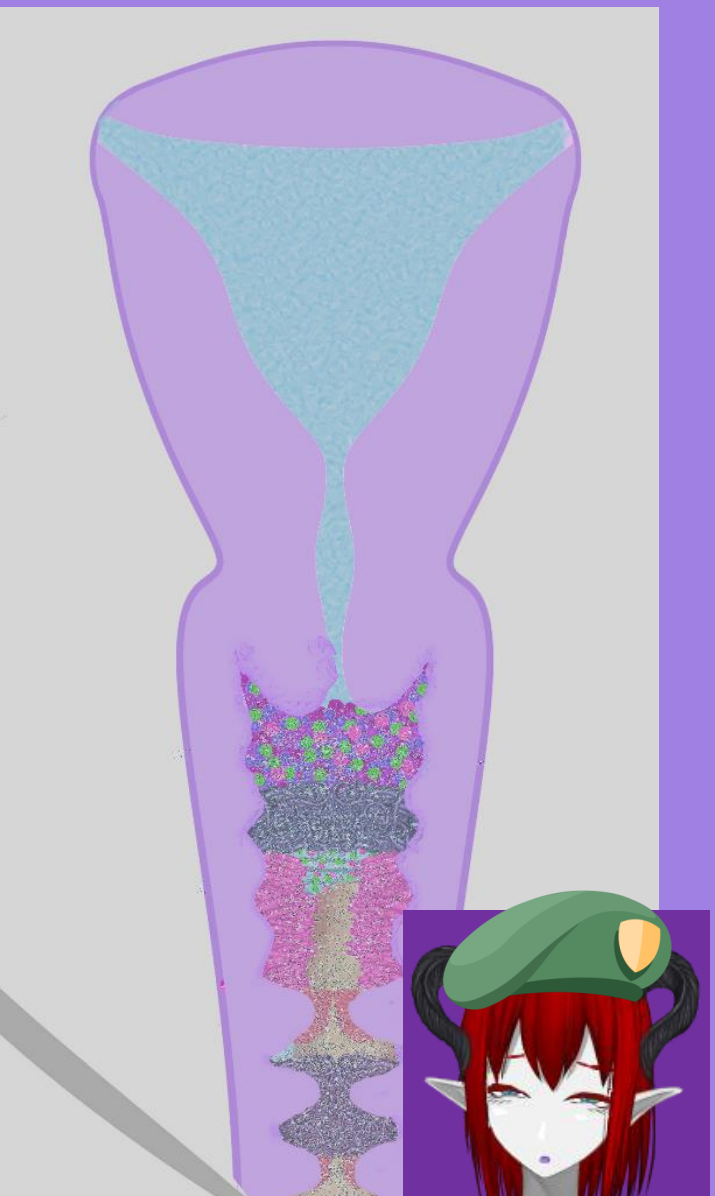
三十分後。

結局一度も射精禁止が解かれることは無く、搾精腔の内部は青年の出した我慢汁でいっぱいになっていた。

「クスクス ♡ これで訓練終了だ ♡

苦しみをくつたが、カウパーを出したということは実質射精と同じだから、訓練としては落第だな ♡

……それにしても、なんて量を出してくれたんだ ♡ 中がアクアリウムみたいになってしまってるぞ ♡



折角の贈り物だが、何の栄養も無いから、全部捨てさせてもらう

♡  
「

そういうと、サキュバスは少し尻を持ち上げた。

ざばーっ  
どぼぼぼぼぼぼぼ

大量の我慢汁が穴から流れ落ち、青年の腰をずぶ濡れにした。

少しとろみがある。保温されて温かい。

青年の辛い体験を、証として改めて思い知らせてくる。

「……」

青年は声も無く、終わったことも判別つかないまま、土の上で打ちひしがれていた。



「さあ、これだけ親身になって鍛えたんだし、雑魚ペニス少しは強くなったかしら？」

先生がテストしてあげる♡」

「ふえ……？」

青年の意識が戻って来た。







「もし射精しちやったら、さっきの射精禁止が天国に思えるくらい  
の、キツッくい『お仕置き』が待ってるからね♡」

「!？」

「何言ってるの?♡ あれだけ親身に鍛えてあげたんだから  
楽勝でしょ?♡」



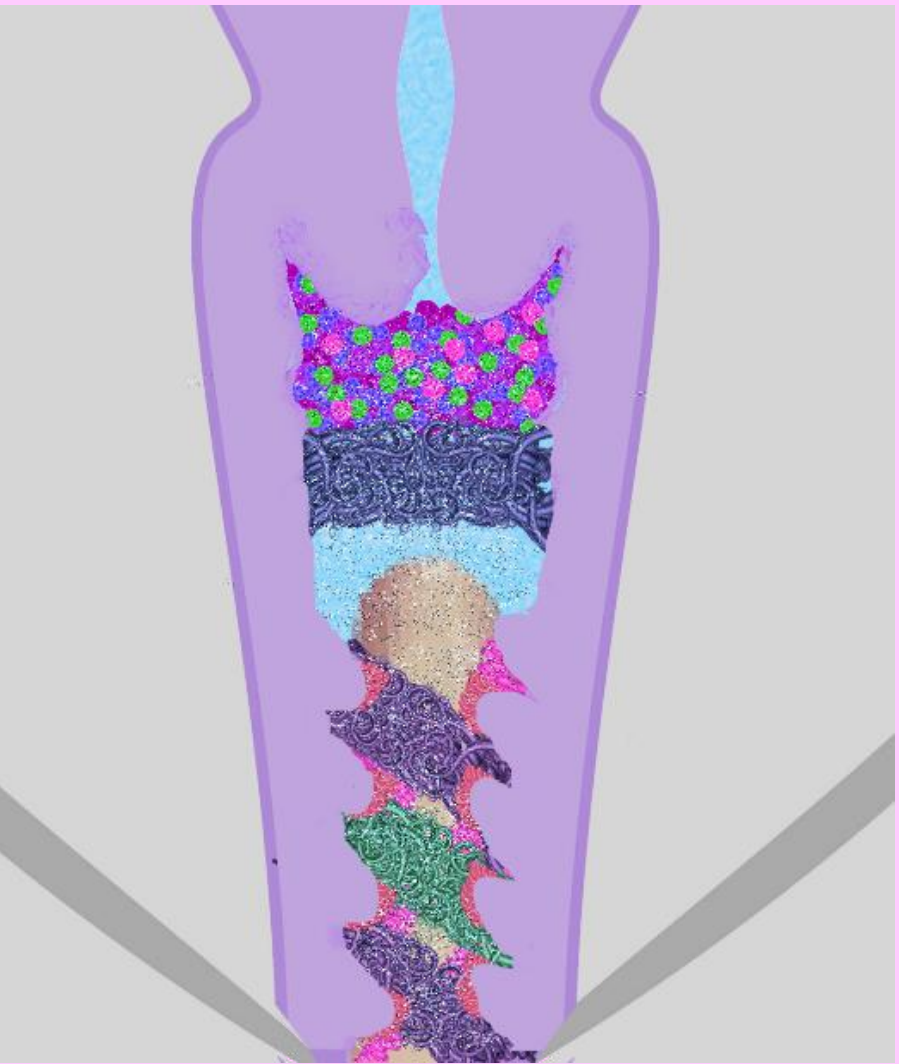
「一回でもイッたら駄目だからね?♡」

ゾツとする。

絶対に無理だ。散々焦らされて、焦らされて、焦らされて、今の状態なら、きつと春風がふわりと表面を撫ぜただけで射精してしまうだろう。

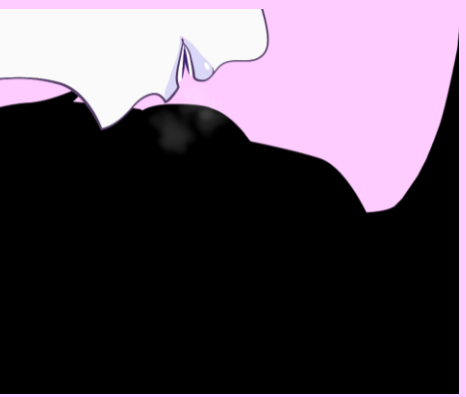
最悪のゲームが始まろうとしている。

「あ、へ……（ま、待って……）」



サキユバスが耳元で囁く。

「それじゃ、スタート♥」





びゅるるるるっ♡ びゆるっびゆるっ♡ びゆくびゆく♡

あえなく、射精。

焦らされた分、まるで溶けた餅のように濃厚な精液が尿道をぶりと通り抜け、鈴口から放出された。

「あああゝゝゝゝゝゝゝ♡」

脳の表面が三センチほど溶けたかのような快感に支配される。



「ああ、三秒も保たなかった♡ 全然成長できなかったね。先生  
悲しいなあゝ♡」

「♡ じゃ、恩師の顔に泥を塗った責任、しっかりとってもらってからね」

サキユバスの言葉によって現実に戻される。

あまりに恐ろしすぎるので、青年の脳は希望的観測に逃避する。

あんな快樂、絶対に耐えられる筈が無い。

だから、きっと罰も、それほど重くは――



……しいん。

全ての動きが止まる。

